

令和元年度 現代社会学部

自己点検評価報告書

－教育研究活動の実績－

1. 概 要
2. 概 況
3. 教養教育
4. 語学教育
5. 専門教育
6. 留学生教育
7. 教育改善・FD 活動
8. 学生生活・生活支援
9. キャリア支援
10. 国際交流
11. 地域交流・地域貢献
12. 入試対策
13. 広報活動
14. 研究活動
15. 後援会・保護者対応
16. 文部科学省令和元年度認定事業「地(知)の拠点大学」

令和 2 年 3 月

富山国際大学 現代社会学部

1. 概要

1. 実績・現状

(1) 学部教育目標の達成

富山国際大学は「共存・共生の精神と知性を磨く教育を基本に、時代の潮流に対応できる、健全にして個性豊かな人材を育成して、国際社会および地域社会の発展に寄与する」ことを基本理念としている。平成 20 年度より発足した現代社会学部の教育目標は、「これからの 21 世紀を支える、国際的センスを持った、地域に精通し、かつ常に時代の潮流に対応できる実践的な人材を育成する」ことであり、12 年間継続し、ようやく学部として地域、高校への存在が定着してきた。

地域のグローバル化に対応できる人材の育成に貢献するため、観光専攻、環境デザイン専攻、経営情報専攻に加え、新たに 4 つ目として地域のグローバル化に対応できる人材育成を強化するため、英語国際キャリア専攻を発足させ、3 月末に 2 年生 7 名は無事海外留学を終えたところである。さらに、本年度から情報教育を強化するため新たなカリキュラムを導入した。各専門教育を通して、地域社会や国際社会に貢献できる人材の育成を目指して教育研究活動を実施している。

また、2018 年度からスタートした第二次アクションプラン(2018-2022)の 2 年目を迎えたが、入学定員の確保を第一目標に、学生に選ばれる学部として存続するよう一層の教育の充実を目指す。平成 31 年度入試では前年に続き入学者は定員を大きく上回ったが、令和 2 年度では受験者が増加したにもかかわらず、多くの辞退者を出し、定員をわずかに満たさなかった。(平成 31 年度 146 名、121%、令和 2 年度 114 名)。今後は、教育内容の充実、施設、通学環境などより学生への満足度の向上に教員が一丸となって努力する必要がある。

学園の教育目標である国際化と情報化に対応する人材の育成を大学教育においても強化し、令和 3 年度入学者向けカリキュラム化の強化を推進する。

(2) 分野別特色

1) 教養教育

本学の教育理念・目標に沿い、共存・共生のアプローチ科目(社会生活基礎科目・社会理解基礎科目)、時代の潮流へのアプローチ科目(情報化対応科目・国際化対応科目)、実学的アプローチとしてキャリア・実務科目、きめ細やかな教育実践として教養演習科目を開講している。自校教育についても「現代社会概論」で実施し、学長、学部長による講義を通して学生たちの大学に対するブランディング意識の定着を目指した。

教養ゼミでは、初年次教育の徹底、eラーニングシステムの活用による SPI 教育にも力を注いだ。また、アカデミック・アドバイザー会議を月 1 回程度開催し、ゼミ生の状況や運営について情報交換を行った。

2) 語学教育

国際人としての能力の向上を目指すため、能力別クラス編成による「基礎英語」の必修化、Toeic や英語国際キャリア専攻設置に伴う、英語の実での授業などを導入し英語力の向上、東アジア地域での国際活動に必要な「中国語」「韓国語」「ロシア語」など副専攻プログラムにも対応できるような語学力の向上をめざし、1 か月以上の留学などにも対応できるようカリキュラムを整備した。Toeic の受験生も英語国際キャリア専攻学生が全員受験した。しかし、今年度は新型コロナの影響で春休みを利用した語学研修は実施できなかった。

3) 専門教育

「基礎科目」「地域づくり科目」「国際交流科目」「情報科目」からなる学部共通科目と、観光・環境デザイン・経営情報、英語国際キャリアなどの専攻科目、さらに、他専攻の科目を学ぶことによって幅広い知識を身に付ける。また、地域づくり実習の発展形として専攻ごとの「実習」を必修化して、地域課題解決能力を育成するため、地域の施設・企業などの現場や実習場所に出向き、実践活動を行いながら、専攻教育の理解を深めている。海外での研修については今年度初めてとなる英語国際キャリア専攻 2 年生の 3～6 か月の英語圏留学、観光、環境デザイン専攻で実施した。経営情報専攻では情報教育科目の新科目を開設した。大学教育の総まとめとして、卒業研究論文の作成では、「卒業論文要旨集第 4 巻」を発刊した。これらの内、地域課題に取り組んだテーマは 53% (51 件) であった。

4) 留学生教育

令和元年度は学部留学生、交換留学生、外国人研究生、合計 35 名であった。日本語教育はプロセスメントテストの成績によりクラス分けしている。学部留学生は全員卒業までに日本語能力検定試験で N 1 合格を目指しているが、達成率は 4 年生で 46% と昨年より向上したものの、まだ努力が必要である。異文化体験授業外では、日本の地域社会と触れ合い体験活動を 7 回実施した。地域の国際化に伴い、観光地での通訳ボランティア（中国語）として参加し、評価を得ているが、今年度末に発生した新型コロナの影響で帰国できない、生活困窮など様々な支援などの対応が必要であった。

5) 教育改善・FD活動

学部学務委員会、学部FD委員会が中心となり教育改善・FD活動を推進した。各専攻の専門科目の内容の見直しなど、カリキュラム改正の検討を行った。FD研修では、教養教育に焦点を当てて意見交換の機会や若手教員の研究活動の公表など、教員の研究内容の情報共有を行い、授業や他分野の教員間の共同研究へ役立てることが望まれる。

6) 学生活動・生活支援

学生主体の大学づくりに向けた取り組みを推進し、賑わいのあるキャンパス作りを学生と教職員との協働で実施している。とりわけ食堂の改善として、業者が交替した。学生生活アンケートの結果では交通の便の悪さが目立ったが、一方で自然環境の素晴らしさを評価している学生もいた。学友会やクラブ会などの代表者との学長等の教員との意見交換会を実施し、学生の生の声をくみ上げるなど、学生満足度の高い持続的な環境作りに努める。学生生活支援チームによる学生の情報共有と対策の迅速化を図るため、担当部門を決め対策を講じた。

7) キャリア支援

キャリア支援体制として、初年次より教育を導入しているが、配慮を様子する学生が増える傾向があり、こうした学生への対応に対する適切な人材が必要である。一方で、就職環境がいいことから、公務員（氷見市行政、唐津消防）・金融・一般企業への内定状況は概ね順調であった。就職希望者 92 名に対して 4 月末で 100% となった。公務員講座を設置して 6 年目に入り、これまでの方法から少数精鋭による、外部支援を WEB で受講する方法で対応しているが、少数ながら合格者を出している。インターンシップについては、著しく参加者が減少し、実施について検討する必要がある。今後はゼミ教員、キャリア担当教員、キャリア支援センターが連携して、景気に関係なく就職に強い人材の育成を 4 年間の教育設計を立てることが必要である。

8) 国際交流

国際交流センターの支援を受けて、留学生の受け入れ、学習・生活指導支援、海外協定校との連携による海外研修・留学プログラム実施、また令和元年度は専攻研修として観光、環境デザイン、英語国際キャリアで実施した。今年度の留学生の受け入れ数は 35 名で、うち正規学部留学生が 11 名と減少し、交換留学生が増加する傾向にある。海外留学や異文化研修は新型コロナの影響により 41 名（昨年 80 名）と半減した。

9) 地域交流・地域貢献

主に本学園サテライト・オフィス「地域交流センター」で実施している、エクステンション・カレッジ及び同プレビュー講座により、地域貢献を行っている。10 月の台風などで希望者が集まることもできない回もあったが、新しいビジネスマン向けの講座を開設するなど新しいテーマでの講座も開設することができた。地域との新たな連携では、黒部市、黒部商工会議所と交流協定に基づき、記念講演会を行った。地域での貢献活動（出講・審議会委員・マスコミ出演等）や学生によるコンペディションへ参加するなど、今後も、地域との連携を通して実践力のある教育も必要である。

10) 入試対策

令和 2 年度入学者数は 114 名となり、入学定員を割った（95%）。特に、3 月後半になって辞退者が急増したことが要因であった。入試種別、高校別入学者数を分析し、令和 3 年度入試に向け定員確保と質の向上の両面から、対策を講じることが重要である。

11) HP・広報活動

大学からの積極的な広報活動として、ホームページでの掲載をリアルタイムで行うように努めた。結果、掲載数は昨年に比べ増加した。大学の特徴ある授業、大学のイベント、学生の活動、教員の社会活動や研究などに関して積極的に報道機関に取材依頼した。今後も積極的に HP、マスコミ共に活用するようにした。

12) 研究活動

教員の研究活動は、学会発表、論文発表の件数により評価した。紀要論文では多くの教員が執筆したが、昨年に続き査読論文の件数は十分とは言えない。また、論文の投稿に関して、研究倫理の研修を徹底した。競争的資金等による採択研究の実績を集計した。科研費採択では研究代表者の採択は 1 名であった。今後は一層の研究環境の整備が必要である。

13) 後援会・保護者対応

後援会理事会・後援会総会、保護者懇談会（2 回）を開催した。後援会総会や保護者懇談会に出席される保護者は徐々に増える傾向にある。

2. 課題

（1）入学定員の確保

令和元年度入学者数は 146 名と大幅に定員を上回った。一方、退学者など不本意入学や学習意欲の低い場合などを含め退学者も増加したが、本年度は念願であった総定員 480 名を満たすことができた。令和 2 年度入学者は 95%と、受験者の動向は昨年と異なった。平成 30 年度発足した英語国際キャリア専攻生は 15 名と昨年の倍増となり、着実に定着の傾向はあるものの、就職準備など次年度の課題も多い。本学の受け入れ学生の質（推薦と一般入試合格者の学力差）改善と入学者の定員確保の両面から戦略的な取り組みが必要である。

（２）少人数教育の魅力を活かした指導

近年の入学者の学力は着実に偏差値が高くなっている一方で、一人ひとりが目標を持ち、モチベーションを持続させる教育指導が求められる。教員自身の研究・研修がますます重要になっている。

（３）情報教育と国際教育を軸とした教育の充実

英語国際キャリア専攻に発足により、語学や国際教養系科目が充実してきたが、ITに強い情報教育のカリキュラム、資格提供を今後充実させる必要はある。次年度に向けて早急に改定が必要である。

（４）教員の研究

若手教員が増え、研究内容も充実してきたが、科研費などの採択実績や投稿論文数は少なく、今後は教員の研究環境の確保が課題である。

（５）その他

少子化の影響により入学者数も減少傾向にある中で、146名入学者を受け入れることが出来た中で、学生自身や保護者の家庭環境など多様であり、経済事情、クレームなどへの対応に苦慮する事例が出てきた。今後は事案によっては早期に大学の顧問弁護士と事前の情報共有、相談などが必要になっている。

2. 概況

1. 実績・現状

(1) 学生の状況

1) 学部生の概要

2019年度富山国際大学現代社会学部在学者数（基本調査）

20190501現在

	学部	学科	総数	男女別数		県内外別数		男女県内外別数			
				男	女	県内	県外	男県内	女県内	男県外	女県外
1 年生	現代社会	現代社会	147	89	58						
	休学		1	0	1						
	合 計		147	89	58	0	0	0	0	0	0
	休学		1	0	1	0	0	0	0	0	0

	学部	学科	総数	男女別数		県内外別数		男女県内外別数			
				男	女	県内	県外	男県内	女県内	男県外	女県外
2 年生	現代社会	現代社会	129	88	41						
	休学		1	0	1						
	合 計		129	88	41	0	0	0	0	0	0
	休学		1	0	1	0	0	0	0	0	0

	学部	学科	総数	男女別数		県内外別数		男女県内外別数			
				男	女	県内	県外	男県内	女県内	男県外	女県外
3 年生	現代社会	現代社会	107	63	44						
	休学		1	0	1						
	合 計		107	63	44	0	0	0	0	0	0
	休学		1	0	1	0	0	0	0	0	0

	学部	学科	総数	男女別数		県内外別数		男女県内外別数			
				男	女	県内	県外	男県内	女県内	男県外	女県外
4 年生	現代社会	現代社会	100	60	40						
	休学		1	1							
	合 計		100	60	40	0	0	0	0	0	0
	休学		1	1	0	0	0	0	0	0	0

	学部	学科	総数	男女別数		県内外別数		男女県内外別数			
				男	女	県内	県外	男県内	女県内	男県外	女県外
全学年	現代社会	現代社会	483	300	183	0	0	0	0	0	0
	休学		4	1	3	0	0	0	0	0	0
	合 計		483	300	183	0	0	0	0	0	0

※表内人数には交換留学生を含まない。

※合計には休学者数を含む

2) 海外学生の出身地（平成 31 年 3 月 31 日現在）

海外学生の出身地（2020年3月31日現在）

国名	1年	2年	3年	4年	計
中国	3	3	12	6	24
ベトナム		3			3
韓国			3		3
ネパール	1		1		2
計	4	6	16	6	32

交換留学生、研修生、休学生含まず。

2+2、学部生含む

3) 県外学生の出身地 (入学者)

平成31年度富山国際大学入学試験状況 (学校法人基礎調査「調査票区分113」資料)

平成31年度入学試験 高等学校卒業年度別 入学志願者数

	平成31年3月卒		平成30年3月卒		平成29年3月卒		平成28年3月卒		平成27年3月卒		外国の学校卒		専修学校の高等課程		その他(認定等)		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
現代社会	162	134	12	5	7	0	1	0	0	0	2	6	0	0	3	1	187	146	333
子ども育成	44	204	8	5	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	54	212	266
計	206	338	20	10	7	1	3	0	0	0	2	6	0	1	3	2	241	358	599

※第2志望にて合格している場合、第2志望の学部にて計上。

※留学生については、国内の学校等(富山情報ビジネス専門・富山国際学院)を卒業していても、「外国の学校卒」として扱っている。

平成31年度入学試験 高等学校卒業年度別 入学者数

	平成31年3月卒		平成30年3月卒		平成29年3月卒		平成28年3月卒		平成27年3月卒		外国の学校卒		専修学校の高等課程		その他(認定等)		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
現代社会	83	51	2	1	1	0	1	0	0	0	1	5	0	0	1	0	89	57	146
子ども育成	12	82	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	16	83	99
計	95	133	6	1	1	0	1	0	0	0	1	5	0	1	1	0	105	140	245

※第2志望にて合格している場合、第2志望の学部にて計上。

※留学生については、国内の学校等(富山情報ビジネス専門・富山国際学院)を卒業していても、「外国の学校卒」として扱っている。

富山国際大学平成31年度出身校所在地別入学者数

学部	性別	富山	宮城	秋田	新潟	石川	福井	山梨	長野	岐阜	愛知	滋賀	京都	島根	福岡	鹿児島	専修学校 高等課程	中国	ネパール	認定試験	計
現代社会	男	71	1	1	1	1		1	2	3	2		2	0	1	1		1	0	1	89
	女	51	0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	0	0		4	1	0	57
	計	122	1	1	1	1	0	1	2	3	2	0	2	1	1	1	0	5	1	1	146
子ども育成	男	16			0	0	0					0					0				16
	女	77			2	1	1					1					1				83
	計	93	0	0	2	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	99
計	男	87	1	1	1	1	0	1	2	3	2	0	2	0	1	1	0	1	0	1	105
	女	128	0	0	2	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	4	1	0	140
	計	215	1	1	3	2	1	1	2	3	2	1	2	1	1	1	1	5	1	1	245

※富士コンピュータ専門学校(高等課程)(子ども育成)は、通学した学校の所在地ではなく、調査書に書いてある所管の県にて計上。

(2) 教職員

1) 教員組織 (2019年5月1日現在)

平成31年度 現代社会学部教員数

区 分	人 数	内 訳
現代社会学部専任教員	22名	教授11 准教授6 講師5
学園内兼任・兼任講師	5名	子ども育成学部4 地域交流センター1
学園外兼任講師	20名	
計	47名	

客員教授3名(川田、佐山、炭谷)含む

2) 事務職員 (2019年5月1日現在、東黒牧キャンパス)

平成31年度 東黒牧キャンパス事務職員数

区 分	人 数	内 訳
専任事務職員	19名	部長1 参事1 課長4 係長3 主査5 主事4 運転手1
契約職員	10名	職員10
計	29名	

船木、高畑、岩本、浜屋、与沢、宮森、河部、長尾、草島、村井(サテライト)

3. 教養教育（教養授業、教養ゼミ、教育指導）

1. 実績・現状

（1）教養授業

- 1) 教養科目として、①「社会生活基礎科目」7科目、②「社会理解基礎科目」8科目、③「情報化対応科目」2科目、④「外国語科目」16科目、⑤「日本語科目」10科目、⑥「キャリア・実務科目」9科目、⑦「教養演習科目」4科目を開講している。2019年度からの新設科目として、「情報科学概論」、「社会学の基礎」、「地域企業講座」を開講した。「情報科学概論」は情報化に対応できる人材の教育を強化する一環として、「社会学の基礎」は、現代社会を俯瞰するための基礎を学ぶ科目として開講した。また、キャリア科目としての「地域企業講座」（2年次配当）で地元を中心に企業を学び、「キャリアデザイン講座」（1年次配当）と「キャリア支援講座」（3年次配当）との連続性を図った。
- 2) 上記教養科目について、学生の授業評価における「総合評価」ポイントは、5点満点中、ほとんどが4点台であり、授業に対する満足度は高かった。

（2）教養ゼミ

- 1) 教養演習Ⅰ（1年ゼミ）に関しては、これまで同様、前期の早い時期での合同教養演習において、「TUINS eラーニングの利用法、図書館利用法」、「健康教育、大学生活のためのツールブック利用法」、「言語・非言語 Web テスト」を、後期に「北日本新聞連携講座」、「SPI基礎講座」を実施した。また、ツールブックを利用したゼミでの指導（例えば、「論文・レポートの書き方指導」（文献引用の必要性やその方法等））については、各々のゼミで様ではないものの、それぞれ工夫しながら取り入れられている。さらに、前期の「言語・非言語 Web テスト」の結果は、本人およびゼミ担当教員に伝えられ、それ以降の本人学習や教員による指導の参考とされた。今後の参考とするため、ゼミでどういうことを行っているかについては、記録に残している。
- 2) 教養演習Ⅱ（2年ゼミ）では、文献の輪読、フィールドワーク、調査したことのまとめと発表およびレポートの作成などを実施した。また、TUINS eラーニングシステムを活用して自主的に学習するよう学生に促した。さらに合同教養演習として、「自己発見アクションプラン」と題してエン人材教育財団の足立美波氏による講義が、「データ社会を生きる技術～人工知能の Hope と Hype」と題して理化学研究所の瀧川一学氏による講義が行われた。これらの講義を通して、自己を理解することと働くことの意味や人工知能と呼ばれる技術をどのように利用したらよいのかということについて考える機会となった。
- 3) 大学祭（10月26・27日）において、教養演習Ⅰと教養演習Ⅱのゼミ活動内容を示すパネル等の展示を、それぞれのゼミごとに行った。特に2年生に対しては、これらのパネルや各専攻の展示を見学し、ゼミ活動や所属専攻における学びについて理解を深めるよう指導した。

（3）教育指導

- 1) これまでと同様、1年、2年ゼミ担当者において、アカデミック・アドバイザー連絡協議会を月1回程度実施し、ゼミ生の様子、ゼミ運営の方法等について、定期的な情報交換を行うとともに、個別的な配慮や指導を要する学生への対応について検討や確認をした。
- 2) ゼミ担当教員はそれぞれ、ゼミ生の授業への出欠状況を把握するよう努め、授業やサーク

ル活動面での情報を関係各所から得た上で、適宜、学生へのアドバイスや指導（必要な改善のための指導等）を行った。

- 3) 保護者との連携のために、保護者懇談会（年2回）を実施し、ゼミ担当教員との懇談を希望する保護者からの相談等に応じると共に、個別対応が必要と考えられる学生の保護者との面談等も行った。教員の側で保護者との懇談が必要と考える場合には、保護者への成績表送付の際に、ゼミ担当教員によるコメントを付して、懇談会出席の呼びかけ等を行っている。

＊ なお、本年度においての退学者は、1年生5名（他大学への転出3名、その他2名。退学率3.4%）、2年生5名（他大学への転出1名、経済的困窮1名、就職1名、就学意欲の低下1名、その他1名、退学率3.9%）である。（2020年3月31日現在）。

2. 今後の課題（2019年度に一定程度の改善がなされたものの、引き続き課題とされるものを含む。）

（1）教養授業

- 1) 授業評価アンケートの結果を踏まえ、引き続き継続的な授業改善への取組。
- 2) ディプロマ・ポリシーや他の授業科目との関連を意識した授業内容のさらなる工夫。（その際、前提として、ディプロマ・ポリシーそれ自体をより具体性を持った内容とする見直しが必要ではないかという点についても。学部として考慮することが求められよう。）

（2）教養ゼミ

- 1) 学生の文章作成能力、プレゼンテーション能力の一層の涵養。
- 2) 様々な学習上の困難や問題等を抱えた学生や、GPAの低い学生への指導（とりわけ、奨学金受給資格を失うおそれや退学勧告を受けるおそれがあることとの関連での指導）等のため、アカデミック・アドバイザー連絡協議会と授業担当者、保健管理センターとの一層の連携強化。
- 3) 「ツールブック」のさらなる利活用の可能性についての意見交換や検討の促進。必要ならば、「ツールブックの内容の見直し」を含めた検討も。
- 4) 「より良いゼミ運営」を目指すための教員間における情報交換の拡充に向けた取組。

（3）教育指導

- 1) 学生に長期留学を促す方法、および留学前・留学中の学生に対する指導方法の検討。
- 2) とくに何らかの支援が必要と考えられる学生については、保護者との定期的な懇談会以外にも、適宜、本人や保護者との懇談を行う場を設けること。

（4）全体に共通する課題

- 1) 「どの程度授業理解が進んでいるのか」または「いかなる教育成果があるのか」を、どのように測るのか（測ることができるのか）について、一定の指標を示すことができるかの検討。
- 2) 初年次教育および教養教育そのものに責任を有する学内機関・学内組織またはその体制づくりが必要かについての検討。
- 3) 教養演習Ⅰと教養演習Ⅱの連続性についての検討。

4. 語学教育

4-1. 英語教育

1. 実績と現状

- (1) 平成 30 年度の基礎英語 I または基礎英語 II 1 年（前・後）・必修科目 は 7 クラスで行い、専任教員 4 名（渡部教授、フランク准教授、パブリー准教授、伊藤講師）と非常勤講師 3 名が担当した。英語で行うゼミ（教養演習 I 英語国際キャリア専攻クラス）を 専任教員（渡部教授、パブリー准教授）が担当した。

英語での科目：

【週に 2 回行う科目】

Intensive English I・II 年（前）（後）・選択必修科目をフランク准教授が担当し、外国語特講（英語） 2 年（前）（後）・選択科目 を 非常勤講師（1 名）が担当した。

【週に 1 回行う科目】

選択科目・1 年（前）英語学（パブリー 准教授）選択科目・1 年（後）英語音声学（フランク教授）、1 年（後）Creative Writing（フランク准教授）、選択科目・1 年（前）TOEIC I（伊藤講師）、選択科目・1 年（後）TOEIC II（伊藤講師）、選択科目・2 年（前）TOEIC III（伊藤講師）、選択科目 2 年（前）Advanced Reading（伊藤講師）、選択科目 2 年（前）Academic Writing（フランク准教授）、選択科目 3 年（前）観光英語（伊藤講師）。

- (2) 英語 I・英語 II に関しては、プレースメントテストを行い、英語クラス分けをした。能力（テストの点数）により、現代社会学部で能力別のクラスを作り、原則として前期と後期クラスは変わらないようにした。その結果として、学生が自分の英語力のレベルにふさわしい授業内容・英語練習などを受けた。

- (3) 学生が英語を母語としている人と触れ合い、英語のみで自由にいろんなトピックについての話ができるイングリッシュ・カフェ（English Café）という施設を開催した。Café の設備、スペースを拡大し、担当者を 3 名から 4 名まで増やした。2019 年度にフランク准教授がコーディネーターとして English Café の利用時間を決め、担当者を管理し、英語に興味を持っている学生を中心に、調理実習イベント、English Movie のイベント、クリスマスイベント、などを行った。English Cafe の 2019 年度の訪問回数が 620 回であった。

2. 課題

英語プレースメントテストの内容を改善し、英語 I・英語 II のより細かいクラス分けをする。学部英語教育、留学プログラムと TOEIC などの英語検定により強く関連させる。イングリッシュ・カフェ（English Café）の活動範囲を拡大して、利用者の人数を増やす。

4. 語学教育

4-2. 中国語教育

【中国語Ⅰ・Ⅱ】(担当：湯 麗敏・銭 輝)

(1) 履修者数および成績評価結果

項目	人数(人)	試験結果	備考
履修学生数	前期 70 名 後期 68 名		
期末試験受験者 (前期)	70 名	68 名合格 2 名不合格	(内 5 名が再テストで合格)
期末試験受験者 (後期)	68 名	68 名合格	(内 7 名が再テストで合格)

(2) 成績評価基準

- ・シラバスに記述した方針(受講態度 20%、課題 30%、期末テスト 50%)で成績評価(素点)を実施。

(3) 授業の成果と問題

- ・大多数の受講生の受講態度がよかった。人数が多いにもかかわらず、授業中、無駄話がなかったし、居眠りもしなかった。それに出席率が例年より良かったし、勉強意欲も例年の学生より高かった。中国語の授業は楽しかったという声があった。教員と学生とのコミュニケーションもよく取れる状態だった。授業アンケート分析によると履修者の 80%以上は、中国語授業を受けて満足したという答えがあった。多数の履修者は中国語と中国文化に興味を持つようになったということも分かった。
- ・授業中、言葉の勉強だけではなく、中国文化、事情も取り入れるのを心がけた結果、学生のそれらを理解と認識度も同時に高められた。中国文化の導入があったから、いっそう中国語の勉強に興味を持たせることができたと思う。
- ・授業は発音・声調、朗読、短文のつくり、簡単な会話に重点を置き、一人ひとりにきめ細かな指導を行った。また履修者同士の参加型授業、グループワークもよく取り入れられて、学生に作業時間を与えるのを心がけた。

<問題>

- ・部活動をやっている受講生は試合に出たり、遠征に行ったりすることでやむを得ず欠席した回数がやや多かった。プリント、宿題を時間通りに提出しない学生もしばしば現れた。

(4) 課題と解決方策

- ・事情によって、個別指導を強化しなければならない。
- ・興味を持ってもらうだけではなくクラス全体の学生の勉強意欲、主体的に学ぶことを引き出すことができるような授業の方法を工夫したい。
- ・中国語検定試験向けの練習指導を強化しなければならないこと。一人でも多くの受験者が現れるように努力したい。
- ・チューター制度をもっと有効的に活用し、中国語の履修者との交流や会話練習などを授業の一環としてしっかりと実施したい。

【外国語特講中国語】（担当：湯 麗敏）

（１）履修者数および成績評価結果

項目	人数（人）	試験結果	備考
履修学生数	前期10名 後期 8 名		
期末試験受験者数 （前期）	9 名	9 名合格	
期末試験受験者数 （後期）	8 名	8 名合格	

（２）成績評価基準

- ・ シラバスに記述した方針（課題 30%、期末テスト 50%、授業態度 20%）で総合的に評価する。

（３）到達目標

- ① 中国語の基礎文法を正しく応用ができる。
- ② 中国人と日常的な会話ができる。
- ③ 辞書を調べながら一般的な中国語の資料が読め、簡単な通訳・翻訳もできるようにと目指すこと。

（４）授業の成果と問題

- ・ 授業を通して、到達目標の①は、クリアできたが、②に関しては、もう少し距離があるようだが、また努力したい。
- ・ 辞書を参考しながら翻訳は少しずつできるようになり、通訳はまだまだな状態である。
- ・ 言葉の勉強と同時に中国文化、中国事情も触れられて、大変有意義な授業だという評価があり、受講者の勉強意欲を引き出すことができた。
- ・ 少人数の授業なので、一人ひとりにきめ細かな指導が行われた。また履修者同士の参加型授業、留学生との交流なども導入した。授業中学生に作業時間を与えるのを心がけた。

<問題>

- ・ 昨年と同じように教室での勉強ばかりをしたが、今後実践練習、観光地現場での勉強と練習をかねての会話を取り組みに工夫したい。

（５）課題と解決方策

- ・ 興味を持ってもらうだけではなく、学生が主体的に活躍できる授業の形態になるための工夫をしなければならないと考えている。
- ・ 大学のチューター制度をもっと有効的に活用し、学習者との交流や会話練習などを授業の一環としてしっかりと実施したい。
- ・ 観光現場での言語実践, 中国語の検定試験を受けようとの促がしにも力を入れたい。

【観光中国語】（担当：湯 麗敏）

（１）履修者数および成績評価結果

項目	人数（人）	試験結果	備考
履修学生数	24 名		
期末試験受験者数 （前期）	24 名	23 名合格 1 名不合格	
期末試験受験者数 （後期）	23 名	23 名合格	（後期から 1 名が放棄）

（２）成績評価基準

- ・ シラバスに記述した方針（課題 30%、期末テスト 50%、授業態度 20%）で総合的に評価する。

（３）到達目標

- ①中国語の基礎文法を正しく応用ができる。
- ②中国人と日常的な会話ができる。
- ③辞書を調べながら一般的な中国語の資料が読め、簡単な通訳もできるようにと目指すこと。

（４）授業の成果と問題

- ・ 到達目標の①に関しては、殆どクリアできたが、②に関しては、達成するまで少し距離があるようだが、また努力が必要である。③に関しては、基礎的なもの、簡単な程度ぐらいは問題がないけれどもやや難易度の高いものに対しては、無理がある。
- ・ 言葉の勉強と同時に中国文化、中国事情も触れられて、大変有意義な授業だという評価があり、受講者の勉強意欲を引き出すことができた。
- ・ 受講生の中に中国人留学生が 4 名いるので、授業中日本人学生と一緒に交流したり、会話練習をしたりして、チューターの役割もうまく果たされた。
- ・ 学生が参加型の授業なので、グループワークが良く行われた。
- ・ 履修者の 4 名が、立山山麓にある 20 数軒のレストランの日本語のメニューを中国語に翻訳する活動に取り組んできた。地域社会に貢献を尽くし、大きな成果が上がった。

<問題>

- ・ 今後実践練習、観光地現場での勉強と練習をかねての会話を取り組みたいと思う。

（５）課題と解決方策

- ・ 興味を持ってもらうだけではなく、学習意欲を高め、勉強成果がもっとあげられるように工夫をしたい。
- ・ 中国人留学生と履修者との交流や会話練習などを授業の一環として更に強化したい。

4. 語学教育

4-3. 韓国語教育

1. 実績・現状

韓国語は平成 24 年度入学生から選択必修科目となり、同時に週 2 回の開講となった。2019 年度「韓国語Ⅰ」（履修登録者 47 名。単位取得者 45 名）では、ハングルと発音の習得、続いて会話練習を織り込みながら初級文法を学習した。「韓国語Ⅱ」（履修登録者 44 名。単位取得者 43 名）では、「韓国語Ⅰ」で学習した内容を復習した後、過去形や仮定形、推量など基礎的文法事項を学習した。

シラバスで「韓国語Ⅰ」の到達目標に掲げた、ハングルの仕組みを覚え、読み書きでき、簡単な自己紹介ができるレベルは受講生の 9 割は到達できたとみている。「韓国語Ⅱ」の到達目標に掲げた基本的な文法事項をマスターし、簡単な会話ができるレベルに到達した学生は、これまで比べ多かった。

中級以上の韓国語授業が開講されていないので、本格的な韓国語学習は協定校での研修もしくは留学を推奨している。

2018 年度韓国語Ⅰ・Ⅱを履修した学生から 1 名、1 年間韓国留学中（2019 年 3 月～2019 年 12 月）である。

2. 課題

ほとんどの受講生が初めて韓国語を学習するので、スタートラインは同じなのだが、前期終了時点では、学生ごとに顕著な理解度の差ができてしまう。これを解消すべく、授業方法の工夫を重ねている。平成 26 年度より自宅学習を促すため、一週間に 1 回程度復習用の学習プリントを配布、翌週の授業で回収し点検している。

また、2019 年度は韓国の協定校、聖公会大学及び大邱韓医大学からの交換留学生 2 名が韓国Ⅰ、韓国語Ⅱの授業にチューターとして参加した。発音指導、会話練習、最近の韓国若者事情の情報提供など授業進行と理解促進に大きな助けとなった。

アクティブ・ラーニング（グループワーク）の導入を継続的に進めている。小グループ内での発音練習、会話練習を多く取り入れた。2020 年度はグループワークを活発化させる新たな方策を種々検討実施したい。

4. 語学教育

4-4. ロシア語教育

1. 実績・現状

ロシア語を初めて学ぶ学生を対象に、やさしく、楽しい授業を展開し、基本的なことを繰り返すことによって、ロシア語の文字、発音、基本的な会話表現、文法を学び、ロシア社会の初歩的な知識も学ぶことができた。ロシア語の基礎知識を得て、挨拶などの実用的な表現を覚えた。ロシア社会の初歩的な知識も学び、ロシア文化について学ぶことができた。ロシア語Ⅰクラスの履修者(5 名)2019 年 11 月に行った第 13 回富山県ロシア語スピーチコンテストに参加し、1 名は 1 位、1 名は 2 位、1 名は 3 位に受賞した。

2019 年

項目	人数（人）	備考
ロシア語 I 前期	6 名	その中に留学生履修者（2 名）
ロシア語 II 後期	7 名	
外国語特講（ロシア語）I 前期	1 名	
外国語特講（ロシア語）II 後期	1 名	
合格者数	14 名	
不合格者数	1 名	

2. 課題

ロシア語を勉強し続けようとした 2 年生・3 年生が少なすぎ、2 年生がロシア語を勉強し続けるように対策を考える。

4. 語学教育

4－5. フランス語教育

1. 実績・現状

- ・平成 28 年度より開講し、令和元年度は 4 年目の授業科目である。
- ・受講生 6 名。
- ・学生の授業の出席状況はほぼ皆勤だった。
- ・毎回授業開始時に小テストを実施し、前回授業内容の理解度を確認した。
- ・授業では、テキスト以外にシャンソンを聴く、フランス国内各地の DVD の視聴、フランス産食材の試食などして、授業が単調にならないような工夫を図った。

2. 課題

- ・1 年間の授業が終わった後でも、特に発音を難しいと感じている学生が多いので、少人数の特長を活かして、できるだけ発音の機会を多く設定する。
- ・授業で学習した内容を活用できる場面を多く示してあげること。特に「話す」側面に、より比重をおいた授業を心がける。
- ・毎年受講生数が多くない理由の一つは、他の外国語と時間割の開講日が違うことが考えられるので、開講日の変更の可否を検討する。

5. 専門教育

5－1. 観光専攻

1. 実績・現状

(1) 観光専攻の専攻科目（講義）

2019年度の観光専攻の1、2、3、4年対象の講義科目（観光専攻専攻科目）は、28科目開講され、専任教員4名と非常勤講師3名で担当した。

専攻科目の専任教員担当科目では、授業手法としてAL技法を活用したグループワーク等を使用しながら双方向の授業を行った。授業アンケート等でも、総合評価関する項目では、4点以上（5点満点）で評価は高い。

(2) 観光実習

1) 概要

<目的>

2019年度は、①地域や地域で展開されている観光事業の現状や問題点をフィールドワークによって把握すること、②今後の観光まちづくりや観光施設のあり方を検討することを目的とする。

<到達目標>

到達目標は次の2点であった。

- ①地域の観光や観光事業の現状や問題点を的確に把握することができる。
- ②現状や問題点を踏まえて、今後の観光や観光事業の方向性を考えることができる。

<実習内容>

上記目的を達成するために次のことを実施した。

- ①班編成ならびに実習の目的等の説明。
- ②調査対象地の事前調査。
- ③現地予察ならびにそのまとめ。
- ④各地域におけるヒアリング調査ならびに調査結果の整理、要点のまとめ。
- ⑤各地域において、観光客へのアンケート調査。
- ⑥報告書の作成。
- ⑦最終報告会。

<成果>

1班は八尾町、2班は上市町、3班は富山市市街地、4班はかん環水公園を調査地として調査を行い、報告書を作成し、学内発表を行った。

報告書では、それぞれの地域でヒアリング調査、アンケート調査を行い、学生独自の発想で具体的な提案を行った。

(3) 専門演習Ⅰ、Ⅱ

2019年度 富山国際大学現代社会学部観光専攻 卒業研究タイトル

ゼミ	番号	タイトルーサブタイトルー
佐藤	1	湯涌温泉の活性化
	2	黒部市生地の活性化
	3	富山市中心商店街の活性化
	4	グリーンツーリズムの現状と課題 ～とやま帰農塾の取り組み～
	5	ワインツーリズムでの地域活性化 ～富山県と山梨県を比較して～
	6	氷見市の観光 ～現状の問題点と解決策の提案～
	7	現代におけるスピリチュアルツーリズムの存在意義について ～大岩山日石寺を中心として～
谷脇	8	とやまの産業観光ー北九州市との比較ー
	9	富山から見た中日観光ー富山空港を通じた中日交流の現状と課題ー
	10	富山県の土産品がもたらす観光行動
助重	11	射水市新湊地区内川沿いにおけるリノベーション施設の増加と住民の反応
	12	募集型企画旅行にみられる道東周遊観光の特質
	13	火山災害に対する観光客の認識と避難誘導の課題 ー富山県弥陀ヶ原と長崎県雲仙を事例としてー
	14	「黒部」「宇奈月」の地名認知の実態と「黒部ルート」開通に向けた 認知度向上策の検討
	15	人が旅に出る契機とその後の旅行行動への影響
	16	富山県における地域スポーツの発展とその基盤 ー朝日町のビーチボール・小矢部市のホッケーを事例としてー
湯	17	お土産が観光資源として成立する可能性について
	18	富山のアウトバウンド実態と課題
	19	地方においてのミュージックツーリズム ～音楽イベントが地域の観光振興に結び付くには～
	20	高岡市万葉歴史館の現状と観光への発展について

専門演習Ⅰは5名の教員、専門演習Ⅱは4名の教員で担当した。教員別の学生数は次の通りである。

専門演習Ⅰ：佐藤（悦）教授10名、助重教授9名、湯教授3名、谷脇講師12名、一井講師3名。

専門演習Ⅱ：佐藤（悦）教授7名、助重教授6名、湯教授4名、谷脇講師3名。

4年次20名は卒業論文を書き上げ、2020年2月に卒業論文発表会を行った。

2. 課題

（1）観光専攻の専攻科目

観光専攻の専攻科目の授業アンケート結果は、比較的高い評価点であるが、講義内容、教育手法に関しては、引き続き専攻内でも検討する必要がある。ビデオ教材が多すぎるとの意見もあるので検討する。

（2）観光実習

観光実習は、グループワークが必要な授業である。学生の中には、グループワークが不得意な学生もいるが、フィールドワークでは問題なかった。2019年度は、2018年度同様にゼミ単位でグループを作った。

（3）専門演習、卒業論文指導

レベルの高い卒業論文を書かせるために、3年次からの指導が必要である。特に文献講読により知識を深め、またフィールドワークを行い、4年次の卒業研究につなげることが重要である。卒論指導においてもある程度教員間で最低限の作法（卒論の組み立て、引用箇所の明示等）を共有する必要がある（2019年度の卒論においては大きな問題はなかった）。アンケート調査による研究が多すぎるのではないかとの意見もあるので2020年度には検討する。

また、観光専攻では、2017年度から卒論書くにあたってフィールドワークを行うことを義務化した。

5. 専門教育

5-2. 環境デザイン専攻

1. 実績と現状

(1) 新たな取り組み

2019年度は以下の新しい取り組みを行った。

① 国際大学における大学 SDG の推進(学長裁量経費)

学内向けには、キャリア支援センターと協力して県内企業が多く集まる 2019 年度企業・事業所・大学講演会にてリコージャパン(株)の SDGs 改革を推進する太田康子氏を招き来場約 400 社に向けた講演をサポートした。またそれに合わせて 100 個の SDGs リングバッジを購入して教職員に配布し大学内での普及啓蒙活動に役立てた。さらに大学内 SDGs 活動をアピールするための大判ポスターを印刷し本部棟に掲げるなどの活動を行った。

対外的には、2018 年度に引き続き富山市 SDGs と連携した事業として「呉羽梨剪定枝等のバイオマス利用実証業務」を実施した。またアースデイ富山、富山環境フェアなどへ学生とともに参加しと SDGs カルタを用いたイベントを実践した(現代社会学部)。また富山青年会議所の要請に応じて 8 月には魚津市において市民向けの SDGs 普及イベントを実施したり、県内小学校での SDGs カルタ実践を行ってきた(子ども育成学部)。さらに県内で SDGs 活動を推進する団体(PEC とやま)と連携した県民に向けた SDGs 普及活動にも参加している。

② 環境研究へのドローンの導入(学長裁量経費ほか)

小水力発電の普及促進のために発電適地を探索することは重要であるが、広域に分散しているうえに人が入り込んで調査することが地形上困難な場合もある。ここでドローンを使って地形調査を行い、探索の効率化を図ることを目的に技術調査を行った。調査は、黒部市田代川の砂防堰堤、並びに富山市八尾町桐谷の谷川において、佐藤工業株式会社の協力のもとでドローン画像から地形の判定と落差測定を試行した。その結果、地形判定と落差計測において新たな手法となり得ることが示唆された。なお結果の一部は学生の卒業研究として論文にまとめている。

③ 地域の人々とともに進める空家コンバージョン(外部資金)

一般社団法人 北陸地域づくり協会の「第 24 回北陸地域の活性化に関する研究助成事業」から研究助成を受け、空家となった町屋をリノベーションするプロジェクトが完成した。これは、南砺市福光において、学生が主体になり地域の人たちと協働して、企画から工事まで、空家を改修してゲストハウスオープンさせるというプロジェクトである。1 階を地域活性化に役立てるギャラリー、2 階をゲストハウスにするコンバージョンが 2020 年 1 月に完成しオープンした。このプロジェクトを題材として、3 名の学生が卒業論文をまとめた。

④ カリキュラムの見直し(2020 年度に向けて)

今後予想される時代潮流の変化に合わせた、専攻カリキュラムの内容の見直しと体系化を実施した。そのポイントとして、①現代社会学部における環境専攻として、地域社会への連動性(連結性)の重視、②初歩から専門までの学年を通じた一貫性ある科目間連携の整理、③教員の交代を意識した科目の取り揃えとした。新たに整理されたカリキュラムは 2019 年入学生から適用され、学生が専門課程にはいる 2020 年度から実行される予定。

(2) 環境デザイン実習

2018 年度までは実習グループをゼミ中心とし、実習テーマもグループごとに自由に設定できることとした。これによって卒業研究に関連する知識と技能習得を 3 年次に開始できることとなり、各自の卒研テーマに近い分野での実習が可能となった。しかしその一方で、3 年専門演習との区別があいまいになるという弊害も見られた。そこで 2019 年度は新たな取り組みとして、実習テーマを①森林資源調査法、②海洋環境調査法、③住宅環境調査法の 3 点に絞り、全員が全ての分野を実施することとした。また臨海実習については昨年度同様にオプションコースの位置づけにして、実習内容の関係から定員を 20 名に限定して自由参加方式とし、7 月に 2 日間の集中にて実施した。

①テーマごとの調査内容

テーマ 1：環境に負荷をかけない地域のありかた

海洋のマイクロプラスチックなどの指標を砂浜においてサンプリング計測し、ここから読み取れる事実をもとに社会との関連性を調査して考察する

テーマ 2：身近な森林資源・植物資源調査

近隣の森林においてプロット調査による森林の過密度評価と身近な地域の植生調査を行い森林・植物資源について理解を深める

テーマ 3：CASBEE を用いた家屋の環境評価

CASBEE の基準にしたがって各自が自宅の環境性能を評価し、グループごとにデータを検討して住環境指標に与える住宅性能の貢献度をみちびく

②臨海実習

実習日：2019 年 7 月 12 日（金）-13 日（土）参加学生 17 名、教職員 2 名

場所：金沢大学環日本海域環境研究センター臨海実験施設

〒927-0553 石川県鳳珠郡能登町小木 ☎0768-74-1151

実習内容：磯採集、海の生物のスケッチ、イカの解剖、乗船実習、ビオトープにおけるアカテガニの観察

(3) 専門演習 I と専門演習 II（卒業研究）

専門演習 I、II とともに環境デザイン専攻の教員 6 名全員で学生を担当した。教員別の学生数は以下のとおりである。

専門演習 I：上坂教授（10 名）、大谷教授（9 名）、川本教授（9 名）、才田教授（8 名）、高橋准教授（6 名）

専門演習 II：上坂教授（8 名）、尾畑教授（1 名）、大谷教授（8 名）、川本教授（9 名）、才田教授（4 名）、高橋准教授（8 名）

(3) - 1 専門演習 I を通した新しい取り組み

①空家の有効利用による地域活性化

3 年ゼミのメンバーを中心として、富山市山田村においては、空家の有効利用の取り組みを行っている。学生が地域の人々と協働し、空家に関する住民意識調査を行った。この結果は、2019 年 8 月に行われた。「地域おこしサミット in 山田村」で学生による発表が行われ

た。また教員と共著で論文としてまとめられた。その後、山田村が富山市の空家バンクの有効に利用するサポートを専門演習Ⅰのメンバーを中心に行っている。

②未利用バイオマスを利用した高濃度 CO₂ 栽培の実践

ハウス栽培の園芸作物において、ハウス内の CO₂ 濃度を高くすることで作物の成長促進が見られることは知られているが、CO₂ 供給を安価に手軽に行う方法が求められている。本テーマは昨年度からの継続として 4 年生の卒研実験に 3 年生が加わる形で 2019 年度いも引きついだ。専門演習Ⅰでは、高濃度 CO₂ 栽培を実践する長野県の農家に訪問し聞き取り調査を行った。また外部資金で大学内に設置した実験用ハウスを用いて、木質バイオマスの発酵実験およびハウレンソウ・コマツナ・イチゴなどの栽培実験を行った。この研究は次年度（2020 年度）の卒業研究として発展させる予定である。

③SDGs カルタの製作と実践

富山市 SDGs 事業と連動し、2018 年度に引き続き 2019 年度もゼミ活動としてさらにカルタ制作を発展させた。地域のイベントなどで世界の貧困や飢餓、食料分配の現実などを小学生に伝えた。

（3）－2 専門演習Ⅱ（卒業研究）の状況

COC+拠点大学としての最終年度にあたり、環境デザイン実習と同様に卒業研究も「地域指向科目」としての性格を強調した内容とした。結果、全 38 件の卒研テーマ中 17 件(44.7%)を地域課題解決型の卒業研究とすることができた(昨年度は 34.2%)。また今年度から例年 1 回であった中間発表を 8 月と 12 月の 2 回とし、卒業研究執筆直前での中間まとめとコメントが有効に機能する指導手順に改めた。

- ・ 第 1 回中間発表会(2019 年 8 月 6 日(火)13:00～17:00 実施)
- ・ 第 2 回中間発表会(2019 年 11 月 22 日(金)13:00～17:00 実施)
- ・ 卒論発表会(2020 年 2 月 6 日(木) 9:30～15:00 実施)

テーマ 38 件（9 月卒業生 3 名含む）、要旨集作成（1 件 A4 判 1 ページ）

テーマ	地域連携
子ども園保育室における落下真菌の実態調査	
福光町における空家リノベーション実証研究その 1	南砺市
中日両国の環境事情～水環境を中心として～	
"福光町の歴史紹介とまち歩きマップの作成～空家リノベーションによる地域活性化～"	南砺市
災害時におけるペット問題—ペット同行避難についての考察—	
屋根材の地域性に関する研究	
富山県における揮発性有機化合物の大気中の分布予測	富山県
資源としての廃棄物分別回収に関する意識調査	富山市
富山国際大学学生の授業中の質問に関する意識調査	
農村部における軽トラック EV 化の意識調査に関する研究	朝日町

"福光町の魅力を発信するギャラリーの提案～空家リノベーションによる地域活性化～"	南砺市
土壌中の六価クロムの簡易分析法の検討	
梨剪定枝のバイオマス燃料としての可能性～乾燥工程に着目して～	富山市
空襲の記憶伝承～富山と秋田における「語り継ぎ」の比較～	
若者言葉をめぐる考察～富山国際大学の学生に対する調査を中心に～	
アスリートの健康と体力向上に向けたタンパク質摂取法の検討	
中国天津市を中心とした電気自動車利用に対する意識調査	天津市
アランの『幸福論』に見る心と体のつながり	
南海トラフ巨大地震対策について～地元を守るために～	
エシカル消費に対する富山国際大学生の実態と今後の普及活動の検討	
富山の黒瓦の由来に関する研究	富山県
庄川扇状地と神通川流域における湧水利用者の意識比較	富山市・砺波市
高齢者ドライバーの心理についての研究	
南富山の交通量調査と駅前広場の提案	富山市
"福光町における空家リノベーション実例報告～空家リノベーションによる地域活性化～"	南砺市
黒部市田糸川における小水力発電の可能性	黒部市
内観者の感情表現の分析	
温泉熱利用による木質バイオマス発酵の促進効果に関する研究	黒部市
日本のお笑い芸人の「笑い」について～「笑いの理論」によるバラエティー番組の分析を中心に～	
エシカルファッション促進に向けた学生のファッションに対する意識調査	
住民が考える南富山のまちづくり	富山市
対馬市と富山市におけるマイクロプラスチックによる汚染実態	富山市
高齢者に優しい住宅設備と施設の現状	
平野部と山間部における太陽光発電の可能性比較	富山市
高濃度 CO ₂ 栽培による作物の生長促進と品質への効果について	
身近な植物を利用した室内のカビ対策～カビに囲まれた生活を何とかしたい～	
身近にある有毒植物による食中毒の動向と人々の意識調査	
イタイイタイ病に関する研究～中国遼寧省への応用可能性～	

(4) 学生による地域連携研究およびボランティア活動

- ・ とやま環境フェアでのボランティア活動(学生延 18 名参加)

(5) その他

①ゼミ教員による学生指導

- ・ エコ検定合格をめざした全教員による受験講座を実施

2019 年度受験者数:30 名、合格者数:16 名、合格率:53.3%)

(平成 30 年度受験者数:32 名、合格者数:15 名、合格率:46.9%)

(平成 29 年度受験者数:31 名、合格者数:20 名、合格率:64.5%)

②グローバル化対応 (グローバルキャンパスプログラムへの参加)

- ・ デンマーク研修には、現社 3 年 4 名、2 年 1 名、子ども育成 2 年 2 名、さらに教員 1 名の計 8 名(引率除く)が参加した。

イギリス建築史研修は 2 回に分けて実施し、3 年生延べ 10 名が参加した。

2. 課題

(1) 学生の自発的興味を引き出す教育方法の開発

学力や学術的好奇心の高い 2016 年度生が 4 年生となり、授業内容や卒業研究も例年になく高度な内容を取り入れる年度となった。2017 年度生においては一旦学力や授業態度に低下がみられるものの、その後の学生も年々就学レベルが高まっており、とりわけ 2019 年度入学生はこれまでとは一線を画するレベルになっている。一方、大学教育の IT 化に追随した新しい教育方法を取り入れていく事も視野に入れる必要もある。

(2) 5 年後に向けた中期計画の策定

専攻スタッフ教員 6 名のうち、4 名が 5 年後までに定年を迎える現状から、中期的な視点から教育内容と人材確保の方針化を検討する必要がある。

5. 専門教育

5-3. 経営情報専攻

1. 実績・現状

(1) 「経営情報概論」テキストの改訂

2015年度より初学者に経営情報専攻での学びをわかりやすく、またテキストでの予習復習を通してより深く教授することを目的として、本専攻オリジナルテキストを作成している。2019年度も4回目の改訂を施し受講生に配布した。作成にあたっては経営情報専攻所属教員7名全員で分担し、各教員2回担当する講義内容を初学者にわかりやすく執筆することを心掛けた。

初学者にとって、「経営情報」の学習内容は多岐にわたり、全体像がつかみにくいという傾向が見られる。2019年度「経営情報概論」テキストでは、経営情報におけるさまざまな学びを系統建てて概要として示し、経営情報の全体像から各自が特に興味を待った分野へと、今後の更なる専門的学びにむけて自らの方向性を見出す一助となることを目指した。

期末に行った授業アンケートにおいて、「経営情報概論」の総合評価が4.24となり、2018年度の4.15から0.09ポイント上昇した。1年生後期末の専攻希望調査で学生数全体の約半数が経営情報専攻を希望した。2020年度は情報系分野がさらに充実する。学生満足度の高いわかりやすい講義を目指し、それをサポートするテキストファイルを作成する。

(2) 専門演習

専門演習Ⅰは6名、専門演習Ⅱは6名の教員が担当した。教員別の学生数は下記の通りである。

専門演習Ⅰ：高橋（哲）教授7名（内、2019年度後期3年次編入の秋季入学生2名を含む）、河野准教授2名、佐藤（綾）准教授5名、高尾准教授3名、伊藤葵講師5名、重本講師5名、計27名の学生がそれぞれの研究室で専攻分野の学びを深めた。

専門演習Ⅱ：後藤教授10名、高橋（哲）教授8名（内、2018年度後期3年次編入の秋季入学生2名を含む）、高尾准教授2名、佐藤（綾）准教授7名、伊藤（葵）講師6名、重本講師6名、合計39名が、それぞれの研究室で卒業研究に取り組み、37名が卒業論文を提出し学位（社会学士）を取得した。

(3) 経営情報実習

1) 実習概要

これまでに学んだ経営情報に関する専門知識を、企業における実習を通して、より実践的な知識にブラッシュアップすることを目的に行なわれた。併せて、課題解決力、コミュニケーション力、チームワーク力を醸成することを目的とした。対象学年は3年で専攻必修科目である。実習先は、(株)富山市民プラザまちづくり事業部と(一社)地域・観光マネジメントの2社である。実習期間は2019年10月～2020年1月であった。

2) 実習の方法

4か月間、毎週木曜午後に学外での実習（「長期インターンシップ」）に取り組む。上記2社にて計26名受け入れていただき、4班（6～7名のグループ）がそれぞれ個別テーマに取り組んだ。

各社実習テーマは下記のとおり。

【株式会社 富山市民プラザ まちづくり事業部】

- ① 街なかの情報発信を考える
- ② まいどはやバスの利用促進に向けた活動

【一般社団法人 地域・観光マネジメント】

- ① 富山での海上アスレチックの設置
- ② 外国人観光客を対象とした PR、商品開発 3 案（富山名物&お酒の学び・味わいツアー、コスたび Toyama、こんまいけ ToyamaFarm 体験プラン）

2020 年 1 月 23 日には成果発表会を開催した。実習の成果は年々充実してきており、地元新聞社の取材を受け、翌日の紙面で取り上げていただいた。

3) 学生の評価

授業アンケートの結果は以下のとおりであった。

総合評価：4.0（昨年度は 4.48）、学生の自己評価：4.2（昨年度は 4.34）、目標の到達達成度：a（コミュニケーション力、チームワーク力、課題解決力などを向上させる）4.07（昨年度は 4.29）、b（大学で学んだ知識を活用することを学ぶ）3.8（昨年度は 4.25）、授業の雰囲気：（昨年度は 4.43）、実習場所の環境：4.27（昨年度は 4.46）

昨年度と比較し、授業評価が下落した。成果物（プレゼン内容）は前年度と比べ進歩したと感じたが、学生の満足度は高くなかった。その原因をさらに検討する必要がある。

（4）卒業研究

専門演習の集大成として 2 回の中間発表を行った後、卒業研究発表会を平成 31 年 2 月に実施、35 名が発表した。2018 年度後期 3 年次編入の秋季入学生 2 名は、2019 年度前期末に別途発表会を実施した。経営情報専攻では、計 37 名が卒業研究発表を行った。2019 年度経営情報専攻卒業研究は以下の 37 タイトルである。

1. 魚津市の「住みやすさ」の現状と展望
2. リーダーシップの研究
3. K-POP がもたらす日本経済への影響
4. カターレ富山のクラブマネジメントにおける地域活動の重要性
5. 日本におけるライドシェアサービスに関する考察
6. 日本コメ農業の「必要性」
7. 買い占め及び高額な転売についての研究
8. Exporting Japanese Landscaping Business
9. ファッション業界におけるハイブランド店舗の現状と課題
10. 自動車による交通事故の原因についての考察
11. J リーグクラブ経営とチーム成績に関する研究
12. 消費税増税に対する若者の意識に関する研究
13. プロ野球球団の経営戦略
14. 日本におけるキャッシュレスに関する考察
15. ブランド戦略に関する一考察
16. テレビ離れの現状とその対応に関する考察
17. バイクを現代で流行らせる方法

18. 複合施設と中心市街地活性化計画の関係性
19. 日本の電気自動車の普及における課題と今後の展望
20. コンビニ経営における時短営業が与える効果
21. 富山県の社会環境の変化が住宅投資に与える影響について
22. Bリーグ経営の現状と課題
23. 高齢ドライバーによる交通事故問題に関する研究
24. 日本マクドナルドの経営戦略
25. 日本でのドローン宅配の可能性
26. 早期離職の動向と今後の展望
27. インバウンド誘致と地域活性化の関係に関する研究
28. フランチャイジー側から見たコンビニ経営
29. 日本プロ野球の球団経営に関する考察
30. SDGS とエシカル消費の観点から見る製造責任に関する研究
31. 日本でのキャッシュレス決済の現状と普及について
32. 化粧品業界の変遷と展望
33. AI が日本の雇用に与える影響
34. AI による顔認証システム
35. EC サイト上での商品購入時の意思決定に関する考察
36. IoT 技術の発展
37. 中国における飲食ビジネス起業に関する研究

2. 課題

経営情報専攻の専門演習では学生の個別指導に力をいれている。その指導に応じて学外学修を含め、積極的に学習し行動する学生が増えている。しかし、種々の問題を抱える学生を担当した教員は多くの時間とエネルギーをその学生に費やさざるを得ない現状には変わりはない。学力あるいは精神的に問題を抱える学生もおり、卒業研究での指導が困難な状況も見られた。2019年度、2名が卒業延期となった。この2名については、専攻教員間で情報交換をしながら全員で指導にあたる気持ちで取り組んできた。幸い、学業を継続する意思はあるので、2020年度での卒業・進路確定を目指したい。教育内容をさらに工夫し専攻学生全員の満足度を向上させていかなければならない。

専門演習での進路指導についても定期的な専攻会議や不定期の教員間情報交換を頻繁に行った。2019度も前年度に引き続き就職率100%を達成し、金融機関、地元有力企業への就職が増加した。専攻での教育指導の成果の一部だと考えている。

経営情報専攻科目の講義については、急速な社会の変化の中で陳腐化しない普遍的なスキル・リテラシーと、Society 5.0時代の新たなリテラシーが求められている。情報系科目の強化など、教育内容の見直しを専攻全体としても続けていく。アクティブ・ラーニングに関しては、取り組みが拡大・定着してきたが、さらに改善を加え、学習成果が高まる工夫を続けていくことが課題である。

5. 専門教育

5-4. 英語国際キャリア専攻

1. 実績・現状

(1) 英語国際キャリア専攻の専攻科目（講義）

2019 年度は専攻第1期生（8名、うち1名は休学）に加え、2期生にあたる21名を迎えた。1年生対象の専攻必修講義科目である Intensive English I（4単位） Intensive English II（4単位）と専攻科目 Creative Writing（2単位）に加え、2年生対象の専攻科目 Academic Writing I（2単位）を開講した。専攻科目の選任教員担当科目では、授業を英語のみで行い、グループワークも実施しながら双方向の授業を行った。更に、教室での授業だけにとどまらず、イングリッシュカフェでの活動も利用し、「外国の食文化を学ぶ」などの切り口で学生の参加を促して好評だった。授業アンケート等でも、総合評価に関する項目ではいずれも4点以上（5点満点）と高い評価を得た。

また、グローバルスタディーズが開講し、提携校4校に2年生計7名が留学した。留学先の国別内訳は、カナダ3名、米国2名、英国1名、フランス1名。このうち1名（米国）は3か月の短期留学、それ以外の6名は6か月以上の長期留学だった。長期留学の学生の多くは、課程終了目前に新型コロナウイルスの世界的な流行が起こったため、予定を数日から1か月程度早めて帰国せざるを得なかったが、留学先の大学がすぐに WEB 講義に切り替えたこともあり、全員が無事に予定されていた課程を修了した。

(2) 英語国際キャリア専攻科目ではないが、主に英語で行った英語学、英語音声学、ならびに TOEIC 対策に役立つ TOEIC I、II、III(各2単位)の科目は、英語国際キャリア専攻の学生の大半が履修し、英語能力の向上に役立てた。

また、年2回（6月、11月）実施している TOEIC IP テストでは、6月のテストに英語専攻の学生がほぼ全員が参加した。

<成果>

授業のほかにも、日本語禁止のイングリッシュカフェでの課外活動などを通して、学生は英語のみの環境に慣れ、長期留学に必要な英語力の基礎と心構えを養った。外部からの視察を受けた際も、学生は積極的かつ自然な様子で英語によるコミュニケーションを取っており、学内で英語環境を整えてきたことの成果が示された。英語力の伸びは、TOEIC IP テストの結果にも表れており、2年生では大学入学後直後の受験時と比べ、約1年間で得点を65～110点を上げており、留学前の時点で最高得点は610点（990点満点）だった。

2. 課題

第2期生にあたる2019年度入学の1年生は当初21名だったが、1名が前期終了後に退学、さらに英語専攻以外の学生が専攻を決定するタイミングで6名が英語専攻から他専攻に変更したため、最終的に計14名となった。転専攻の主な理由は、①「留学が経済的理由から困難」②「英語疲れした」など。①に関しては、入学前から「留学は必須」と説明しているにも関わらず、留学が目前に迫るまで現実的に捉えていない傾向がうかがえる。費用がかかることでもあり、早い時

期から保護者も巻き込んで留学に向けた心の準備をしてもらう必要があると思われる。また、英語を専門的に深めていくという意識が備わらないままに専攻を決めてしまう傾向も、後期に相当数の転専攻者を出す結果につながっていると思われる。こうした状況を防ぐためには、やはり入学後のどこかの時点で、選抜試験なり面接なりを行って専攻を決めてもらう、という方法も検討すべきではないかと思われる。

6. 留学生教育

1. 留学生現状

国籍	2019年度(前期)					国籍	2019年度(後期)				
正規生	中国	韓国	ネパール	ベトナム	合計	中国	韓国	ネパール	ベトナム	合計	
人数	29	3	2	3	37	25	3	2	3	33	
非正規生	中国	韓国	ロシア	ウクライナ		中国	韓国	ロシア	ウクライナ		
人数	7(1)	3	2	2	7	15(2)	6	2	2	10	

※非正規生のうち()内は研究生

留学生学年別

正規生人数	2019(前期)	2019(後期)
1年生	5	5
2年生	6	6
3年生	13(4)	15(6)
4年生	13(8)	7(2)
合計	37	33

※()は編入2+2の学生

奨学金受給状況：

奨学金名	金額(月額)	受給人数	
		前期	後期
富山国際大学奨学金	2万円 ※1	20	17
	4万円 ※2	2	2
富山県国際交流奨学金	5万円 ※3	3	3
	1万円 ※4	2	1
J a s s o 学習奨励費	4万8千円	1	1
朝日国際教育財団	3万5千円	4	4
朝日国際教育財団・特別奨学生	10万円	1	1

※1 富山国際大学奨学金(2万円)は協定校からの入学者のみに支給(対象外は前後期共8名)

※2 " " (4万円)は聖公会大学からの交換留学生のみに支給

※3 富山県国際交流奨学金(5万円)受給者のうち1名は協定校外の学生

※4 富山県国際交流奨学金(1万円)は協定校外からの1年生に優先的に割り当てている。

宿舎別入居状況：

大学が民間アパートを借り上げ、前期28室、後期27室を留学生に提供している。21名交換留学生のほかに、6名の学部生も利用している。そのほかに近くのアパート及び富山市内の民間アパートを利用している。

実績と課題

在籍している前期 44 名、後期 43 名の留学生は、海外 6 ヶ国の協定校と日本国内にある日本語学校から進学してきた学生である。本学の海外協定校の数が増えることにより、受け入れた留学生数も年々増えている。大学は近くにある民間アパートを棟ごと借り上げて留学生に宿泊の便宜を提供していることから、通学の利便性、留学生同士の交流や友人関係づくりにプラスになっている。生活上の困難があったら、すぐそばに友達がいるので、お互いに助け合える。このことから留学生の大多数は、概ね安心、且つ充実した留学生活を送られている。その点においては、留学生派遣側から評価を得ている。

最近、交換留学生の数が増えられるとともに、大学近くにあるアパートの部屋が不足する状況になってきたため、各協定校に人数制限依頼をおこなった。

ここ数年来、正規留学生の質がよくなり、日本語レベルも高まりつつある喜ばしいこともあった。令和元年度、卒業した留学生のうち 3 名が大学院に進学、2 名が日本で就職、1 名が帰国することになった。

残念ながら自立性が弱く、且つ日本語能力も低い留学生が数名いるので、今後さらなるきめ細かな指導と温かい支援をし続ける必要がある。留学生それぞれの勉学意欲と日本語のレベルが相変わらず大きな差があるのを認識している。これらを踏まえて、今後いろいろな面での厳しく、かつ多様な指導が求められる。

2. 日本語教育現状

留学生に早く日本での生活に慣れてもらい、大学での勉強についていけるように、そして将来国際社会に有用な人材になってもらうために、留学生に対して日本語の教育に力を入れてきた。1 年次入学時にプレースメントテストの成績によりクラス分けをして日本語の教育を行っていた。

① 通常の日本語クラス

留学生を対象にした日本語のクラス

基礎日本語 I・II (週 2 回)

中級日本語 I・II (週 1 回)

実践日本語 I・II (週 2 回)

上級日本語 I・II (週 1 回)

日本語総合演習 I・II (週 1 回)

日本語補習 (前期週 2 回：中野、才田 後期週 4 回：中野、才田、交換教員担当の 2 回)

※前期は、大連海洋大学との教員交流制度で着任した顔景義准教授が、週 2 回の補習授業を担当することにより、充実した教育を行うことが出来た。

そのほかに、来る留学生の日本語のレベルの差が大きくて、特に非漢字圏から来た留学生が、全体の日本語の授業に着いていけるように日本語の補習授業を週に 4 コマ増えた（非常勤の留学生指導相談員である銭輝先生が担当した）。

② 通常の日本語補習の授業以外に、銭輝支援員・湯により日本語や生活、卒業後の進路などの指導が随時に行われた。

実績と課題

新カリキュラムのシステム導入後、卒業までに日本語能力検定試験 1 級を取らないと卒業ができないという意識を今留学生の中で少しずつ持つようになった。各自が日本語の習熟度によって、自主的に検定試験を受けるようになった。昨年の 12 月までのテスト成績の把握状況は次の通り。

日本語能力検定試験各学年の合格者数：

2019（前期）				2019（後期）		
学年	在籍数	N1 人数 (%)	N2 人数 (%)	在籍数	N1 人数 (%)	N2 人数 (%)
1 年	5	0	0	5	1 (20)	3 (60)
2 年	6	0	3 (50)	6	0	4 (67)
3 年	13	1 (8)	5 (38)	15	4 (27)	10 (67)
4 年	13	6 (46)	9 (69)	7	2 (29)	5 (71)

卒業するまでに日本語検定試験の 1 級に合格するという目標に達せ率は、まだ低いですが、すこしは例年より高くなりつつある状態である。これから、いかに留学生の日本語のレベルを高めてあげるかは、課題だと思い、そして専任と非常勤の日本語授業の担当者との緊密な連携、情報交換、授業改善に力を入れることは目下の急務であると認識した。

3. 留学の生活指導

毎週の火曜日と木曜日の午後 2：30～5：30 の時間帯では、留学生を対象にする銭輝支援員による個別指導と支援を行った。必要に応じて特別教養演習も実施された。

内容は、日本語の勉強、日本の文化、伝統、生活習慣、日本の礼儀作法など、強制ではなく、自由参加の形であるため、参加者人数が多い時と少ない時もあった。そのほかに、留学生の悩み、困ることについての相談、遵守すべき規律、守るべきルール等の指導とアドバイスも随時行われていた。

授業のほかになるべく日本の地域社会あるいは日本人との触れ合いできるチャンスを与えようと下記の体験活動を実施し、イベントへの参加を案内した。

（安全管理・活動指導のために岩木学生課長・湯麗敏が同行した）

行 事		期 日	場 所	参加人数 (留学生)
1	外国人留学生県内研修（チンドンコンクール、市内への見学、お花見）	4月6日(土)	富山市内	20
2	外国人留学生県内研修 (チューリップフェア会場・白川郷)	4月29日(土)	砺波市・白川郷	21
3	中国人留学生による模擬店の開催	10月26, 27日 (土・日)	富山国際大学	25
4	外国人留学生「黒部峡谷異文化体験」	11月4日(月)	黒部市	23
5	富山市国際交流フェスティバルへの参加留学生日本異文化体験発表会の開催	11月17日(日)	富山市内	15
6	留学生による宇奈月温泉現地での観光調査研究	11月21、22日 (木・金)	黒部市宇奈月町	12
7	富山国際大学留学生総会・懇談会	12月19日(木)	富山国際大学	40

実績と課題

令和元年度もいろいろなボランティア活動への参加により、留学生たちの日本社会、日本人、日本事情を理解することに大いに役立った。

今後、より充実した留学生生活を送ることができるように留学生一人ひとりが日本人と触れ合い、友達を作り、積極的にコミュニケーションが取られるように努力をしてもらいたい。卒業後に日本社会や母国に貢献する有用な人材になれることを願っている。

年度末に一時帰国を予定していた留学生が数多くいたけれども、未曾有の新型コロナ肺炎を拡大防止するために、大学の呼びかけに答えて全員一時帰国を取りやめた。しかし、長期休みに入り、宿舎に残っていた留学生たちへの生活指導、危機管理、外国人滞在ビザの許可、延期できるかどうかなどいろいろな問題が発生する可能性がある。このような緊急時期、非常時期の留学生管理が大変重要な課題として看做さなければならない。いざという時に迅速かつ正確な対応ができるよう努めなければならない。

7. 教育改善・FD 活動

1. 実績・現状

(1) ホームページや電子掲示板の活用

- ・ゼミ活動、クラブ・サークル活動、ボランティア活動などにおける学生の活動や取り組みの成果を学内外の人々に広く知らせるため、大学ホームページを積極的に活用した。
- ・学内においては、図書館等入口と厚生棟内に設置してある大型液晶モニターを電子掲示板として活用した。大学からの連絡や授業の変更情報などのほか、部活動の対外試合の結果など学生の活躍についても情報を共有できるようにした。また、4号館2階ホールに設置した掲示板を用い、新聞などで報道された学生や教員の活動を紹介した。

(2) 優秀卒業論文の表彰

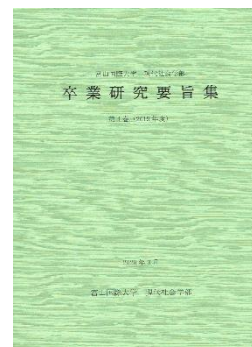
- ・卒業論文の質の向上を図るため、2015年度（平成27年度）より優秀卒業論文を各専攻から2題ずつ選出し、執筆した学生を学位記授与式で表彰している。2019年度（令和元年度）の優秀卒業論文は、以下の通りである。なお、例年は学位記授与式で優秀卒業論文のパネルを展示しているが、2019年度に限りパネル展示は行わなかった。

2019年度優秀卒業論文

専攻	論文題名
観光	とやまの産業観光 ～北九州市との比較～
観光	火山災害に対する観光客の認識と避難誘導の課題 ～富山県弥陀ヶ原と長崎県雲仙を事例として～
環境デザイン	土壌中の六価クロムの簡易分析法の検討
環境デザイン	黒部市田糸川における小水力発電の可能性調査 ～ドローン技術による測量にも注目して～
経営情報	魚津市の〈住みやすさ〉の現状と展望
経営情報	Exporting Japanese Landscaping Business ～A Possibility of Business Chance in Canadian Market～

(3) 卒業論文要旨集の作成と配布

- ・2016年度（平成28年度）より現代社会学部において、全専攻全学生の卒業論文の要旨を掲載する「卒業研究要旨集」を作成している。2019年度は卒業研究要旨集第4巻を作成し、関係者に配布した。
- ・2019年度は97件の研究を掲載し、そのうち45件が富山県内の地域の課題・活性化を題材として取り上げたものであった。



卒業研究要旨集第4巻（2019年度）

(4) 副専攻プログラム

- ・2019年度は、副専攻プログラムの修了者として、のべ4名の学生が認定された。内訳は、グローバル人材育成プログラムについては3名（川平裕太郎、高木里佳、奥村あかり）、地域創成人材プログラムについては1名（奥村あかり）であった。

(5) 富山県寄付講義（現代社会学部）

- ・研究や地域活動などの現場で活躍するスペシャリストを講師として招き、富山県寄付講義を実施した。現代社会において注目されており、現代社会学部の学生にとって重要であると考えられるテーマを、学長、学部長、専攻長が中心となって選定した。
- ・2019年度は、以下の5講座を開講した。

2019年度（令和元年度） 現代社会学部 富山県寄付講義

	日時・会場	専攻名・授業名・講義テーマ	講師名
1	6月13日(木) 10:40~12:10 東黒牧C 大講義棟 I	学部共通 「現代社会概論」 「防災減災と地域づくり」	室崎 益輝 氏 兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究所 教授
2	11月6日(水) 10:40~12:10 東黒牧C 大講義棟 I	経営情報専攻 「経営情報概論」 「お金の基礎知識」	野村 充 氏 株式会社 富山第一銀行 副頭取
3	11月21日(木) 13:00~14:30 東黒牧C 4号館 441 室	環境デザイン専攻 「環境デザイン特別講義」 「環境と福祉の接点」	炭谷 茂 氏 社会福祉法人 恩賜財団済生会 理事長 富山国際大学 客員教授
4	11月22日(金) 10:40~12:10 東黒牧C 4号館 441 室	英語国際キャリア専攻 「国際キャリア概論」 「英語で仕事に、英語で仕事を」	早川 幸治 氏 株式会社 ラーニングコネクションズ 代表取締役

5	12月17日(火) 10:40~12:10 東黒牧C 大講義棟I	学部共通 「教養演習Ⅱ」 「データ社会を生きる技術 ～人工知能の Hope と Hype～」	瀧川 一学 氏 理化学研究所 革新知能研究センター 研究員
---	--	---	--

(6) 授業改善に向けたFD活動

1) 授業評価アンケート

- ・2019年度(令和元年度)の授業において、学生に対して実施した授業評価アンケートの結果をもとに、全専任教員が授業内容を振り返り、授業改善の成果などについて考察した。授業評価アンケートの結果については全教員が知見を共有するとともに、抜粋したものを学生全員に配布した。
- ・2016年度(平成28年度)後期からWEBアンケートを実施しており、回答率の向上や調査結果の分析など、さらなる改善を図っている。

2) FD研究会開催実績

①両学部FD・SD研修会 2020年(令和2年)2月26日(水)13:30~15:00

- ・対象： 全教員、職員
- ・目的： 全国の私立大学等の動向、学生支援の最新状況を踏まえ、今後の本学の教育支援にどう繋げ、どう実現すればよいかを考察するために実施した。
- ・内容：
 - (1) 私立大学協会主催「教務部課長相当者研修会」報告について
全国の私立大学の動向について、私立大学協会が2019年9月24日(火)から27日(金)にかけて開催された研修会の概要について報告を受けることにより情報を共有した。
報告担当：子ども育成学部 松山 友之 准教授
 - (2) ディプロマ・サブリメントについて、Webシラバス入力方法等について
ディプロマ・サブリメントについて、シラバス作成上の注意点、Webシラバス入力方法等について理解を深めた。

②現代社会学部第1回FD研修会 2019年(令和元年)9月11日(水)15:00~15:30

- ・対象： 全教員
- ・目的： アセスメントポリシーについて理解を深めるために実施した。
- ・内容： アセスメントポリシーの考え方や今後の方向性について大谷孝行学務部長から説明があり、各教員が理解を深めるとともに、学修成果のよりよい評価手法について考える機会となった。

③現代社会学部第2回FD研修会 2020年(令和2年)2月12日(水)15:00~16:30

- ・対象： 全教員
- ・目的： 学部内の教員の研究内容について理解を深めることを目的として研究発表会を実施した。また、ディスカッションを通して参加者が自身の研究のアイディアを得たり、共同研究の可能性を考えたりする機会とする。さらに、本学における研究活動の活性化に向けて考察することも目的とした。

- ・内 容： 現代社会学部の教員の研究について1人20分程度研究紹介と質疑応答、さらに全体ディスカッションを行った。2019年度は、研究においてデータを取得して解析する手法を用いている教員のうち、代表して3名が発表した。研究紹介の内容は以下のとおりである。

1) B. パブリー准教授

タイトル：ソーシャルネットワークにおけるバイリンガリズム問題について実証的な研究

内 容：ソーシャルネットワークを使用し、バイリンガリズムやマルチリンガリズムの問題を実証的に研究する方法、必要性、実績について説明。現在と将来の研究について。

2) 河野信准教授

タイトル：ライフサイエンス分野におけるデータ共有

内 容：データの標準化、オープンサイエンス、データジャーナルなどの紹介。

3) 伊藤雄馬講師

タイトル：あるフィールド言語学者の実践：方法と展望

内 容：現代言語学の課題、フィールド言語学の概要、最近の研究である感情表現の意味についての紹介。

④その他のFD活動「令和元年度大学コンソーシアム富山FD&SD研修会」

2019年（令和元年）9月17日（火） 13:30～16:30

- ・対 象： 大学コンソーシアム富山構成組織の教職員
- ・目 的： 教員の授業内容や教育方法などの改善・向上、職員の業務改善、サービスの向上を目指して実施された。2019年度のテーマは「これまでの初年次教育の成果と課題」であった。
- ・内 容： 基調講演「これまでの初年次教育の成果と課題」（北陸大学 経済経営学部長・教授 山本 啓一 氏）の後、富山大学、富山国際大学、富山県立大学より事例報告がなされた。

2. 課題

（1）現行カリキュラムにおける教育の充実

- ・2018年度（平成30年度）からスタートした「英語国際キャリア専攻」では、2020年度に3年次の授業が開講する。また、これまでのカリキュラム変更に伴い、新たに開講する科目もあることから、これらを通して教育のさらなる充実を図っていく。
- ・また、2020年度は、教育内容のさらなる充実を目指し、カリキュラムの見直しを行う。

（2）GPAの成績評価への活用

- ・また、2019年4月から学期のGPAが1.0未満であった学生に対してフォローを実施しているが、担当教員のみならず、他の教員を含めた総合的なサポートを行える仕組みをさらに充実させていく予定である。
- ・現行制度では意図的に登録単位数を減らすことにより、GPA（Grade Point Average）の数値を上げようと試みる学生がいる。このため、学生の表彰などの際にGPAをもとに選考す

ると、学ぶ意欲が高いために多くの授業を履修した学生が不利になる場合もある。今後、成績による学生の表彰などには、登録単位数で割らずに Grade Point の合計で評価するなど、意欲のある学生が不利にならない仕組みの検討が必要である。

(3) 卒業論文のレベルアップ

- ・卒業論文に関しては、優秀卒業論文の表彰の実施や各専攻による卒論発表会の活発化により 5-6 年前よりも向上していると思われる。しかし、卒業研究に真剣に取り組まなかった結果、卒業論文が一定のレベルに至らなかったという学生も存在する。卒業研究の質のさらなる向上が今後の課題である。

(4) 今後の FD 活動

1) FD 研修会の検討

- ・2018 年度までの FD 研修会では、授業をよくするための技術的な研修や授業参観が多かったが、2019 年度は教員個人の研究報告を実施した。これにより、教員の研究に対するモチベーションの向上につながったようである。教育の充実のためには、教員の研究の充実も必要であるから、このような研修を継続していくことは、大学の質の向上にとって有益であると考えられる。
- ・授業参観については廃止したわけではなく、教員が他の教員の授業をいつでも参観してよいことになっている。2020 年度も自主的に教員同士が学びあう仕組みを継続していく。
- ・今後も教育の質の向上につながる研修を実施していく。

2) e ラーニングの活用

- ・e ラーニングについては、入学前教育、学期のオリエンテーション、教養演習・専門演習などを通して学生に利用方法を紹介してきた。ただし、2019 年度は、教養演習の授業時間内では実施しなかったため、あまり利用頻度が多くなかったようである。今後、学生の利用状況や課題について調査し、どのように活用していったらよいか検討していくことが課題である。

8. 学生活動・生活支援

1. 実績・現状

(1) 学生主体の大学づくりに向けた取組み

1) 学生との意見交換会の開催

- ・学友会役員、大学祭実行委員会実行委員長、クラブ会会長および学長、学部長、学務部長、学部学務委員長、事務部長との懇談会を開催し、学生との意見交換、学生生活・授業・施設に関する要望等の聴取を行った（2019年12月5日実施）。施設の空調やWi-Fiなど設備環境に関する要望については事務部と連携し改善を図ることにしたほか、休講情報の提供をスムーズに行うため、大学のHPを活用しやすいように構造全体の見直しを検討することとした。
- ・学友会役員、学務部長、事務部長、学務部学生課、学部学務委員と食堂の運営委託先企業担当者間で、食堂の活性化に関する意見交換を行った（2020年2月3日実施）。食券の販売方法や、オペレーション方法など、より学生の利用を促すための工夫を検討していくことになった。

2) 学生主体の大学行事運営とその支援

- ・各種行事において学生が主体となって運営することを促し、教職員がサポート役に回ることとで学生の自主性向上に努めた。いずれの行事においても反省会を行い、それを次年度に生かすことで行事の活性化が図られている。
 - ① 新入生歓迎会（2019年4月5日）
 - ② スポーツ文化交流会（2019年6月5日）
 - ③ 学友会総会（2019年7月23日）
 - ④ オープンキャンパス（2019年7月20日、8月10日）
 - ⑤ 大学祭（紅嶺祭）（2019年10月26～27日）
 - ⑥ 東黒牧キャンパス交通安全運動（毎月1回）
 - ⑦ クリスマスイベント（イルミネーションの点灯、クリスマスケーキの配布）（2019年12月～2020年2月）
 - ⑧ クラブ会総会（コロナウイルスの影響に伴い、2020年3月24日にメールでの審議を行った）
- ・大学祭では、地域との交流促進を図るため、富山県内のハンドメイド作家を集めて「TUINSマルシェ」を実施したほか、富山県総合デザインセンターとのコラボレーション企画を実施し、2019年度の富山プロダクツ選定企業商品の展示を行った。
- ・こども育成学部の学生と協働で実施する行事については、Web会議やメーリングリストなどITを活用することで、スムーズな情報共有を図ることができた。
- ・学生の活動を、広報誌のコスモス通りやホームページで積極的に紹介した。
- ・例年、卒業式終了後に行っていた「卒業記念パーティー」については、コロナウイルスの影響を踏まえ、中止にした。

(2) 学生生活関係アンケート

1) 学生生活アンケート（2019年9月末～2020年2月に実施）

- ・昨年度から Web ページによる回答方式に変更した。しかし、学内の Wi-Fi 環境なども足かせとなり、回答率は昨年同様 75%という状況になった。
- ・通学に関しては、昨年と同様、1 時間以内の通学時間の学生が 74%であり、1 時間から 1 時間半の学生が 17%、1 時間半以上の学生は 9%であった。
- ・学業に関する満足度では、充実した授業、学力の向上、教授陣の充実、資格就職関連授業で満足度のいずれにおいても大きな変化は見られなかった。
- ・学生生活全般の満足度は前年とほぼ同水準で非常に満足・ほぼ満足の割合は 55%で昨年よりやや下がった。
- ・パソコンの使用頻度の減少が目立つ。普段はスマートフォンでメールや SNS、情報検索などを行ない、パソコンは授業での使用、Word、Excel、PowerPoint の使用などと使い分けられてきている。
- ・施設の満足度に関しても前年から大きな変化は見られない。こども育成学部と比較して評価が高かった項目は、事務手続窓口、パソコン利用環境であり、評価が低かった項目は食堂や教室外スペースの充実、クリーンな環境などである。これらの対策として、交通安全運動の際にごみのポイ捨てや喫煙ルール違反につきチェックした。

2) 卒業生アンケート(2020 年 2 月、各専攻卒業論文発表会終了後に実施)

- ・大学生生活全体の満足度に関しては、2018 年は、満足 55.7%、やや満足 36.6%、2019 年は満足 54.1%、やや満足が 36.5%とほぼ同じであった。
- ・PC/ネットワーク環境や、教室環境の満足度については、満足度がやや低下した。
- ・資格取得の満足度については低下したが、就職活動の満足度は昨年並みである。
- ・どのような力が伸びたと感じているかについては、昨年並みである。
- ・大学で学んだことの役立ち、大学生生活全体の満足度についても昨年並みであった。
- ・IC カードについて、「満足」「やや満足」と回答した割合は 2017 年度の 75%から 2018 年度は 90%と大幅増となった。2019 年度は、やや減少した。
- ・後輩・親戚に本学を薦めたいと考える卒業生の割合は 2017 年度が 55.6%であったが、2018 年度は 72.6%と大幅増加した。しかし、2019 年度 52.7%と減少した。
- ・ディプロマポリシーについては、全体的に昨年度より達成項目が減少した。
- ・昨年度から Web ページによる回答方式に変更した。しかし、学内の Wi-Fi 環境なども足かせとなり、回答率は昨年同様 75%という状況になった。

(3) 学生支援チームの取組み

- ・学生生活に困難を抱える学生を支援する体制を強化するために、学部長、学部学務委員長を含む 4 名から構成される学生支援チームを 2017 年度に設置。2019 年度は、9 月 26 日に第 1 回ミーティングを、そして、3 月 23 日に 2 回目のミーティングを実施した。
- ・ミーティングでは、配慮を要する学生の状況の共有、学生支援および留学生の指導に関する課題抽出、対応策の検討を行った。配慮を要する学生に関しては、学習指導のみならず、保健センター、キャリア支援センター等との連携の必要性、一貫したサポート体制の構築が必要であること、諸活動の学生については、寮生活等の生活面を含めたメンタル支援など、きめ細やかな指導が必要であることが確認された。

(4) 学生トラブルにかかわる啓発活動

- ・昨今、学生を取り巻くトラブルが多様化しており、アルバイトや就職活動、サークル活動を騙った悪質な商法、投資への誘導にかかわるトラブル、インターネットにかかわるトラブル等が多発している状況から、2018 年度より、富山消費者生活センターの協力のもと、啓発講義を実施している。2019 年度は、4 月のオリエンテーションの機会を使い、全学年を対象に行った。

(5) 学生活動の広報活動

- ・スポーツ文化交流会などの学内活動、啓発講義などの取組み、ゼミナール活動、学生の学外における活動（富山県青年議会への参加や国際交流イベントへの参加等）や、部・サークル活動の業績などを積極的にホームページで紹介した。

(6) 交通安全指導

- ・学生主体の交通安全運動を継続した。その際、ティッシュ配付による交通安全の周知徹底依頼だけではなく、駐車場の利用など、マナー向上に向けた呼びかけも行った。

(7) クラブ・サークル活動(休部中のものを含む)

[部：9 団体] 硬式野球部、サッカー部、女子ハンドボール部、ボート部、軽音楽部、吹奏楽部、ボランティア部、陸上部（新規）、男子バスケットボール部（休部中）

[サークル：11 団体] バドミントンサークル、環境サークル、芸術サークル、国際交流サークル、バスケサークル、水泳サークル、ボードゲームサークル、ダンスサークル（休部中）、English Media Club（休部中）、経済リサーチサークル（休部中）、茶道サークル（休部中）

(8) 「夢へのかけ橋助成事業」の改善、活性化

- ・ゼミ活動などを通した夢への懸け橋事業への応募について検討した結果、2019 年度は申請数が全 11 件となり、現代社会学部からは 5 件の事業が採択された。以下の通り、他分野にわたる取組みがなされた。

[事業名（助成金額、円）]

- 広域観光を推進するための「観光まちづくりプラン」の作成（160,000）
- 高濃度 CO2 利用農法による甘い野菜づくりの実証（118,000）
- TUINS サッカー教室 2019（70,000）
- わくわくボードゲーム～みんなで一緒に lets think～（38,000）
- 東黒牧活性化大作戦（100,000）

2. 課題

(1) 学内環境の改善に向けた課題

- ・学生生活アンケートでは交通手段の拡充に関する要望が強い。交通機関との調整等、学内外の調整が必要な事象であり対応は容易ではないが、学生からの要望が強いとの認識を学内で共有し、必要に応じて外部の関係団体と交渉するなど努力する。
- ・2018 年度に続き、2019 年度においても学生生活アンケート、卒業生アンケートの Web 化に伴うアンケート回答率の低下が続いた。次年度以降はスムーズな集計にむけ準備を進めるとともに、集計データのさらなる利活用に務める。

(2) 学生主体の大学行事運営の支援

- ・2018年度の懸案事項となっていた大学祭運営に関する財政問題については、2019年度の実行委員会の努力により改善に向かっている。その一方で、大学祭実行委員会のメンバーが大幅に減少しており、運営体制への支援をどのようにしていくのかについて、2020年度は検討する必要がある。

(3) 学生生活にかかわる啓発活動の継続

- ・交通安全については事故ゼロを目指し、従来の交通安全啓蒙活動に加え、新たな交通事故防止のための取組みにつき検討する。
- ・学生トラブルの多様化を踏まえ、学生生活にかかわる啓発活動については次年度以降も継続する。

(4) きめ細やかな学生支援の継続

- ・配慮を必要とする学生の就学支援、キャリア支援などについては、学内の他部署・委員会との連携強化を図り、さらなる支援体制の構築を進める。

(5) 子ども育成学部との交流

- ・こども育成学部との交流機会については、スポーツ文化交流会が年に1度あるほかは、異文化研修、グローバルキャンパス研修などの海外研修に限られている。両学部の交流の活性化につき検討する。

9. キャリア支援

1. 実績・現状

(1) インターンシップ (8月～9月)

「富山県インターンシップ推進協議会」主催のインターンシップ、および本学独自の海外インターンシップの参加者数は計 21 名であった。受入先企業・機関の評価および事前・事後研修への参加態度等についての判断を行い、その全員が単位認定された。海外インターンシップについては、今年度より新たに JTB-TNT ハノイ支店、H. I. S. ハノイ支店の 2 社を開拓し、各々 1 名が参加した。以下に、2019 年度のインターンシッププログラムの概略を示す。

回	日程	時間	研修内容	備 考
1	4/10	3	ガイダンス① インターンシップ説明会(キャリア支援講座内)	第1回目のキャリア支援講座a内で説明
2	4/25	—	第一次申込締切(研修希望先調査票提出)	ゼミ担当教員に必ず相談し、署名と捺印をもらうこと
3	5/7	—	マッチング作業(教職員)	担当教職員で作業
4	5/15	4	ガイダンス② マッチング結果発表	企業とマッチングしなかった学生は指示に従う
5	5/18	—	事前研修① インターンシップ説明会参加(学外)	午前か午後のどちらかにスーツ着用で参加する
6	5/22	—	第二次申込締切	5/15にマッチングしなかった学生のみ事務局に届出
7	5/29	4	ガイダンス③ 学研貸付帯賠償責任保険加入	研修参加学生は全員210円を支払い加入する
8	5/31	—	参加企業入力エントリー締切	「INTERNSHIP NAVI とやま」に研修エントリー
9	6/19	4	事前研修② インターンシップ参加の心得	担当一後藤教授・殿村講師
10	6/26	4	事前研修③ 身だしなみ講座(スーツ着用)	担当一外部講師(私服の学生は出席不可)
11	6～8月	—	事前面談(就職アドバイザーとの面談)	殿村講師・高沢講師・ハローワークと研修前に面談
12	7/3	4	事前研修④ テーマ発表	指示された教室に分かれて発表
13	7/10	4	事前研修⑤ マナー講座 Part1(スーツ着用)	担当一高沢講師(私服の学生は出席不可)
14	7/17	4	事前研修⑥ マナー講座 Part2(スーツ着用)	担当一高沢講師(私服の学生は出席不可)
15	8～9月	—	インターンシップ研修	企業内研修(各自学外で現場実習)
16	9/27	—	事後研修① 研修報告書提出	後期オリエンテーション時に実施
17	10/2	—	「研修レポート」「日報整理」のデータ提出期限	実施報告書を作成するため期限厳守
18	10/16	4	事後研修② 研修報告会	指示された教室に分かれて発表
19	11/13	—	パワーポイント課題提出期限	10日に満たない研修期間の場合、提出が必要
20	11/20	3	事後研修③ インターンシップ学内報告会(キャリア支援講座内)	キャリア支援講座bで実施(1・3年生合同)
21	12月	—	就業体験発表会(他大学にて開催予定)	本学から選抜された学生1名が他大学の会場で発表

(2) 「職場研修及び企業訪問」

大学コンソーシアム富山主催の本研修については、今年度も現代社会学部 3 年生に参加を呼びかけ、90 名が参加し、富山大学、富山県立大学等の他学と合同での研修を行った。

(3) 「令和元年度 富山国際大学 企業・事業所・大学講演会」

同講演会を、以下の内容で開催した。

日時：2019 年 11 月 29 日(金) 16:00～19:00

場所：富山電気ビルディング

講師：リコージャパン株式会社 太田 康子氏

演題：「今こそ SDG s で企業価値をあげよう ～SDG s の社内浸透 99.6%はこうして実現した～」

参加企業数： 108 社（講演会出席 145 名、懇親会出席 130 名）

（４）模擬面接実習の実施

就職の個人面談に向けた実習を下記の２回に分けて実施した。

① 2019 年 12 月 13 日～23 日

② 2020 年 1 月 23 日～29 日

（５）学内企業研究会

企業の採用担当者を招いての企業研究会を、以下の通り開催した。これは、3 年生の必修科目である「キャリア支援講座」の一部としても位置付けられている。例年は 3 月に「合同企業説明会」として開催していたが、企業の採用活動の早期化を踏まえ、2 月に「学内企業研究会」として開催した。なお、子ども育成学部 of 学生も数名参加している。企業からの「アンケート結果」については、「求人状況」、「印象に残った学生」といった内容も含むため、ゼミ担当教員全員に配布し、学生への就活指導に役立てることとした。

日時：2020 年 2 月 14 日、2 月 18 日

場所：東黒牧キャンパス 厚生棟

参加企業数： 2 月 14 日 68 社、2 月 18 日 68 社

（６）公務員採用試験対策

昨年度後期から導入した新たな公務員試験対策講座（Web 講座）を、本格的に運用することとなった。受講生は、1 年生が中心で、2 年生と合わせ、14 名となっている。Web による講座受講とは別に、年 4 回の個別面談を伴う指導（メンターサポート）を実施し、個々の受講生の状況把握をしながらの講座進行となっている。また、より効果的な指導を行うため、夏休み以降、Skype を利用した個別指導も試行的に導入した。また、講座受講生のための「学習室」の提供も行っている。こうした講座では、受講生に対する個別のケア（学習内容にかかわる指導はもちろんだが、それ以上にモチベーションの維持など）が欠かせない。次年度は、そうした面の一層の充実を図っていくことが求められる。

今年度の公務員採用実績は、地方自治体の行政職と消防職に各 1 名、であった。

（７）就職状況

2019 年度は就職希望者 85 名に対して内定率は 100%となった。就職実績ならびに内定企業については次表の通りである。2017 年度、2018 年度に続き地方自治体の行政職に 1 名採用されたほか、本学から就職実績のなかった大手製造業やサービス業にも内定している。進学については、金沢大学大学院に 1 名、富山大学大学院に 3 名合格したほか、京都大学、富山大学に各々 1 名、研究生として受入れられた。

2019 年度現代社会学部就職実績（2020 年 3 月 31 日現在）（単位：人）

学部	性別	学生数	休学者	就職希望者	内定者	内定率	未内定者	進学・留学希望者	内進学・留学決定者	進学も就職もしない	卒業延期者
現代社会	男	59	0	50	50	100.0%	0	0	3	4	2
	女	40	0	35	35	100.0%	0	0	4	1	0
	計	99	0	85	85	100.0%	0	0	7	5	2

ある。

2019（令和元年）年度資格取得状況

資 格	受検者	合格者	合格率
日本語検定	25名	3級18名 準3級6名	72.0% 24.0% 計 96.0%
ビジネス能力検定 3級	120名	109名	90.8%
ビジネス能力検定 2級	48名	38名	79.2%
ECO検定	30名	16名	53.3%
国内旅行業務取扱管理資格	8名	5名	62.5%
総合旅行業務取扱管理資格	0名	0名	0.0% 試験中止
日商簿記検定3級	27名*	6名*	22.2%
日商簿記検定2級	6名*	0名*	0.0%

* 大学教務課申し込み分（富山商工会議所会場）のみ。個人申込み分を含まない。

（9）情報発信

就職支援は保護者や受験生など外部の情報利用者からの関心も高い。本学ではきめ細やかな就職支援を実施しているにもかかわらず、これらの活動が十分に周知されていなかったことから、これまで年2回程度だった大学HPにおける情報発信を7回に増やした。

2. 課題

今後の課題として、以下の点が挙げられる。

- ・就職希望者のうち、精神的な問題を抱える学生、コミュニケーション力に問題のある学生の就職支援のあり方については、本人への指導や支援のみならず、保護者や、必要な場合には専門家も含めた形で進める体制を整える努力をしていくことが、引き続き求められる。
- ・企業研究指導については、なおも十分とは言えない。合同企業研究会におけるアンケートにおいても、本学学生の企業研究や自己分析に関する評価が低く、支援体制の構築が求められる。
- ・OB・OGとの交流については、学生がOB・OGにコンタクトをするためのツールが確立されていない。そのため、今年度はその第一歩として、在学生が閲覧可能な卒業生の就職先の簡易リスト開示をキャリア支援センターに依頼した。
- ・公務員試験対策については、新たなWeb講座を今年度から本格運用している。受講者の大半が1年生であり、ほとんどは市町村の行政職を志望している。今後は、いかに意欲を持続しつつ学習に臨めるか、といったことが課題となる。そのために、メンターサポートの際などに学年を超えた交流を行うとか、Skypeによる個別面談・指導を増やすといったことも予定しているが、その

効果の検証をしながら、講座内容の改善や講座のアピールに繋げていくことが求められる。さらに、市町村職員以外の「選択肢」についても考えてもらえるようにしていくことも必要であろう。

- ・学内企業研究会を2月に開催したことは、企業の採用活動の動きや3月以降の新型コロナ問題等を鑑みれば妥当であった。ただし、学生が関心のある企業と参加企業 mismatches などが指摘され、企業の新規開拓が課題である。
- ・留学生の日本企業への就職希望を叶えるための対策が求められる。また、2020年度には英語国際キャリア専攻の一期生が就職活動の時期を迎えることから、英語能力を重視する企業の開拓なども課題である。情報分野の強化を踏まえた情報関連の専門性を生かす就職先の開拓についても同様である。
- ・2018年度まで教養演習ⅠⅠで実施していた2年生向けのSPI対策講座を2019年は実施しなかった。2020年度以降、SPI対策については1年次のキャリア・デザインaで実施すること、2年生に対してはe-Learningで対応可能であるとの理由による。SPI対策は筆記試験対策として重要であることから、e-Learningが十分に活用されているかなど今後、注視する必要がある。
- ・2019年度はインターンシップの参加者が大幅に減少した。夏の1dayワンデーインターンシップの増加など企業の採用活動の変化、富山県のインターンシップ推進協議会の体制など複数の要因が考えられるが、学生が職業につき考える重要な機会であるため、企業の動向等を見極めながら、より魅力的なプログラムとなるよう検討する必要がある。
- ・企業・事業所大学後援会や学内合同企業説明会などで実施したアンケート結果が十分に生かされていない。これらの情報を生かし、学生のニーズと企業のニーズをつなぐキャリア支援の在り方について検討する必要がある。
- ・2019年度は3月以降、新型コロナ問題の影響でほとんどの会社説明会が中止になるなど、就職活動をする学生はこれまでに無い対応を迫られている。厳しい状況ではあるものの、WEB対応等により、継続的な支援を続けていくことが求められる。

10. 国際交流

1. 海外留学・海外研修参加者

2019年度は日韓関係の悪化に加え新型コロナウイルス肺炎の世界的流行の兆しの影響により、現社5つの海外研修プログラムが中止となったため、派遣数は大きく減少した（表10-1 & 3）。なお、中止になったプログラムは表10-4の通りである。

海外留学は8名、そのうち英語国際キャリア専攻生が7名でその他の専攻からは1名のみだった（表10-2）。全員が英語圏への留学で、中国、韓国への留学はいなかった。

表 10-1. 学部毎の海外派遣学生数

海外派遣総数	2016		2017		2018		2019	
	69		81		98		57	
各学部	現社	子ども	現社	子ども	現社	子ども	現社	子ども
	57	12	54	27	80	18	41	16
留学	11		7		11		8	
	10	1	7	0	9	2	8	0
インターンシップ	3		1		2		3	
	3	0	0	1	2	0	2	1
研修(教員引率)※	55		73		85		46	
	44	11	47	26	69	16	31	15
※異文化研修、国際交流実習、ゼミ研修、グローバルキャンパス								

表 10-2. 海外留学派遣国内訳 H30（2018）年度

留学内訳	2018			2019		
	合計	現社	子ども	合計	現社	子ども
アメリカ	1	1	0	2	2	0
カナダ	1	1	0	3	3	0
オーストラリア	2	1	1	1	1	0
イギリス				1	1	0
マルタ	3	2	1	0	0	0
フランス	0	0	0	1	1	0
中国	1	1	0	0	0	0
韓国	1	1	0	0	0	0
ウクライナ	2	2	0	0	0	0
留学合計	11	9	2	8	8	0

新規協定校が増えたことも留学数増加の要因となっている。ウクライナのオデッサ大学へ初めて留学生を送り出すことが出来た。また、昨年度協定校となったマルタ留学も人気があり、短期・長期留学共に増加している。

海外派遣促進策のひとつとして日本学生支援機構の奨学金が貰える短期海外研修プログラムを用意した。

表 10-3. 海外研修プログラム参加者数

海外研修内訳	2018			2019		
	合計	現社	子ども	合計	現社	子ども
中国(異文化研修)	8	7	1	7	5	2
韓国(")	13	10	3	0	0	0
オーストラリア(")						
カナダ(")	10	1	9	9	0	9
マルタ(")	9	9	0	8	6	2
タイ/マレーシア(")	7	6	1	0	0	0
デンマーク(環境専門研修)	9	9	0	7	5	2
シンガポール/オーストラリア(経情)	20	18	2	6	6	0
インターンシップ(カナダ・ベトナム)	2	2	0	3	2	1
ゼミ研修	9	9	0	9	9	0
研修合計	87	71	16	49	33	16

表 10-4. 中止になったプログラムとその理由

プログラム名	中止理由
異文化研修 (韓国)・前期	日韓関係悪化により参加者
異文化研修 (オーストラリア)・前期	最少催行人数に達せず
異文化研修 (マレーシア)・後期	新型コロナウイルス肺炎感染拡大
異文化研修 (韓国)・後期	"
グローバルキャンパス (経情)・後期	最少催行人数に達せず

2. 外国人留学生受入数（交換留学生を含む）

正規生 11 名、交換留学生 22 名、研究生 2 名、合計 35 名の受け入れを行った（表 10-5）。正規生の内訳は国内の日本語学校からの 1 年次入学が 5 名、中国協定校からのダブルディグリー入学が 6 名で、その合計人数は前年度より 2 名多かった。しかし、2019 年度は日本人入学者数が 145 名と過去最高だったことから、入学者全体に占める留学生の割合は 7.6%と前年度より低くなった。

正規生の出身国は中国、韓国が減少し、ネパールとベトナムが増え多国籍化している（表 10-6）。非正規生（交換留学生及び研究生）はロシアとウクライナが前年度より増えている。ロシア・ウクライナに限らず殆どの協定校からの交換留学受け入れ希望が増えており、各協定校に対して人数制限依頼を行った。

表 10-5. 年度別外国人留学生受け入れ数（年度別入学者数）

入学年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
学部1年生入学	14	20	25	19	10	16	11	8	6	9	6	5
編入学(2+2)	0	0	0	0	4	2	2	1	9	9	2	6
交換留学	17	17	14	15	17	15	10	9	14	19	22	22
研究生	0	8	7	7	0	8	5	0	3	2	1	2
留学生入学者総数	31	45	46	41	31	41	28	18	32	39	31	35

表 10-6. 令和元（2019）年度正規入学生出身校

出身校	人数	所在国
鞍山師範学院	1	中国
ハルビン理工大学	3	
大連海洋大学	1	
南通大学	1	
富山国際学院	3	日本
富山情報ビジネス専門学校	1	
ARC 東京日本語学校	1	
合計	11	

3. 留学生の進路（2019 年 9 月及び 2020 年 3 月卒業）

2019 年度の学部卒業生は 2019 年 9 月卒業が 7 名、2020 年 3 月卒業が 6 名の合計 13 名だった。そのうち 3 名が大学院進学。3 名が研究生として進学した。県内就職は 4 名、帰国者が 3 名であった。（表 10-7）。

表 10-7. 卒業後の進学（学部卒業生）

No.	出身国	卒業年月	進路
1	中国	2019 年 9 月	富山国際大学研究生（佐藤悦夫先生）
2	中国	〃	帰国
3	中国	〃	帰国
4	中国	〃	北陸コカ・コーラボトリング(2020.4 入社)
5	中国	〃	富山大学研究生（人間発達・宮城信先生）
6	中国	〃	東洋電機製作所（上市町）2019.10 入社
7	中国	〃	富山大学大学院（理工学教育部・張勁先生）
8	中国	2020 年 3 月	小林建設（株）
9	中国	〃	富山大学大学院
10	中国	〃	富山大学大学院（経済）
11	中国	〃	帰国
12	中国	〃	東旭産業
13	中国	〃	京大大学院研究生

4. TOEIC 受験者数と結果

TOEIC IP テストを2回実施した。前年度より受験者数は大幅に増加し第1回目の6月15日には65名（現社40、子ども25）、第2回目の11月30日は8名（現社3、子ども5）だった。結果は最高得点が710点、最低が170点だった。470点以下が最も多く、600点以上は両学部合わせて3名、730点以上はひとりもいなかった。

表 10-8. TOEIC IP テスト学部ごとの集計結果

	全学	現社	子ども	全学	現社	子ども
試験日	2019/6/15			2019/11/30		
受験人数	65	40	25	8	3	5
～470	53	34	19	6	2	4
470～599	10	5	5	1	1	0
600～729	2	1	1	1	0	1
730 以上	0	0	0	0	0	0
800 以上	0	0	0	0	0	0
平均点	372	355	399	424	377	103
最高得点	710	610	710	710	505	710
最小得点	170	170	250	275	275	345

5. チェルネット

チェルネット（クラウド型英語学習教材スーパー英語）を学生全員に利用を推奨している。3年目となった2019年度は1年生のみに利用説明会を行った。現代社会学部のログイン率は1年生95%、2年生67%、3年生49%、4年生49%、子ども育成1年生74%、2年生5%、3年生74%、4年生0という状況である。しかし、継続的な利用者は両学部とも少ない。

6. その他語学関連の取組み

- ① English Café620名利用者有るも運営が課題。
- ② English Camp は2学部から16名が参加した。
- ③ グローバル人材1名取得（現代社会学部）。
- ④ ロシア語スピーチコンテスト5名が参加し、優勝、2位、3位に入賞した。

7. チューター制度の実施

日本人3名、留学生7名がチューターを行った。日本人チューターは基礎日本語や日本語補習授業に参加して会話練習の補佐を行った。休み時間中に日本語以外の授業のノート指導をする学生もいた。留学生チューターは、それぞれの母国語の授業に参加して担当教授のアシストを行った。このようなチューター制度を通して、留学生と日本人学生の友達の輪が広がることを期待している。

表 10-9. チューター参加者 2019 年度

	学籍番号	国籍
1	2018G124	日本
2	2017G001	日本
3	2016G042	日本
4	2017G551	韓国
5	2017G553	韓国
6	2017G507	韓国
7	2017G502	中国
8	2016G008	中国
9	2017G901	中国
10	2017G509	中国

8. 国際化への取組み

- ① 遼寧省の大学との教員・学生交流（学生交流は本学で実施）
- ② 遼寧省の大学との交流（現地訪問：本学の学生が 7 名参加）
- ③ 受け入れ（顔講師一大連海洋大学から 6 ヶ月間）

9. 教職員のグローバル化に向けての取組み

- (1) 英語で対応するための SD 研修会

日時：9 月 20 日（金）13：30～15：00

場所：本部棟 2F 会議室及び呉羽 E 館会議室（テレビ授業）

講師：マーク・フランク現代社会学部准教授

参加者 10 人

10. 成果と課題

- (1) 学生、教員のグローバル化を目指した取り組みを行ってきた。学部教育では英語教育の充実、海外派遣の促進、地域で英語に関わる活動など多様に学生、教職員が参加した。東黒牧キャンパスでの English Café では留学生と日本人学生が英語で交流することもしばしば見かけるようになったが、関係教員の働きかけによるところが大きい。これが学生たちの自主的な活動になるよう仕組みづくりをする必要がある。
- (2) 海外派遣学生数を増やす方法のひとつとして Jasso 奨学金に採択されるよう国際交流センター教員を中心に努力した。その結果、4 つのプログラムが採択され 67 名分の奨学金を確保することが出来た。

採択プログラム名	受給人数
韓国での地域課題解決基盤創造キャンプ	30
地域のグローバル化を担う海外インターンシップ	11
KINABALU ECOLINC PROJECT 協働支援プログラム	12
Japan's bridge across Oxbridge	14

今後もプログラムの見直しは必須項目として検討すべきである。例えば異文化研修オーストラリアは未執行が多いが、学生アンケートによるとオーストラリという地域や文化に興味のある学生が多い。このことから魅力ある研修プランを作ることは可能だと思われる。更なる海外派遣学生数増加を目指すため、予算執行の効率化を図る点からも、早急な検討が必要である。

(3) 2019 年度後期は新型コロナウイルス肺炎の世界的流行により異文化研修韓国と国際交流実習（マレーシア）を中止にした。一方で実施したプログラムもあった。これは中止の判断基準が曖昧なのと、その判断がプログラム担当者に任されていたことが要因だった。危機管理の点から、今後は大学の危機管理の点からしかるべき部署の判断が必要である。

(4) グローバル副専攻は現代社会学部から 1 名のみの認定となった。語学基準がハードルとなっている。1 年生にこの制度の意義を説明し、早くから目標を持って取り組むよう働きかけることが重要である。学生による海外研修や留学報告などを開催するなどして、多くの学生に動機づける必要がある。

(5) 留学生の入学者が減少傾向にあることが危惧される。長期ビジョンに立った戦略が必要である。

●学部 1 年生：国内の協定校との関係強化を図る。学生に対する説明会の開催や必要な便宜許与。

●編入（2+2）：重点校との関係強化。交換留学や教員交流の在り方を再検討し、受験者を確保できそうな協定校にサービスを集中する。特に重要だと考えられるのはハルビン理工大学、瀋陽師範大学、南通大学である。

11. 地域交流・地域貢献

1. 実績と現状

(1) 南砺市と富山国際大学及び富山短期大学の包括連携に関する連携協議会

第1回連携協議会

- 日時： 2019年5月14日（火）10:02～10:53
- 内容： 富山国際大学「富山国際大学 南砺サテライト リレー講座 2019年度 受講生募集要項」と富山短期大学「2019 富山短期大学 公開講座 募集のご案内」に関する意見交換を行った。

第2回連携協議会

- 日時： 2020年1月7日（火）10:25～11:40
- 内容： 今年度南砺サテライトでのリレー講座受講者数及び使用状況の報告（高齢者が多い、ほとんどが井波の人。申込をしても当日来ないことが多い）、サテライト利用状況報告（公開講座、介護福祉士実務者研修5回、砺波地域障害者自立支援協議会ワーキング7回、ゼミ活動、包括ケアセンター会議、南砺との協議会等）、次年度事業（南砺サテライト講座 大学は継続する、短大は実施しない方針）、出張学園祭（大学は実施を予定、短大とは調整中）について報告と意見交換が行われた。

第3回連携協議会

- 日時： 2020年2月26日（水）10:36～11:28
- 内容： 南砺サテライト・リレー講座（大学は継続実施予定、短大は実施しない）、出張学園祭（大学は予算が通れば実施する。短大は共同で実施する方向で調整）、南砺市長との懇談会・意見交換会（学生の意見も聞きながら、やり方・進め方を決める）について報告と意見交換が行われた。

(2) 黒部市・黒部商工会議所との包括連携に関する連絡協議会

第1回連携協議会

- 日時： 2019年6月25日（火）9:30～11:00
- 内容： 国際化推進事業（後期授業科目「キャリアデザイン講座」「経営者講座」に会社の人に講師となってもらう）、中心市街地活性化支援事業（最近、雑貨・古着の店を若者が運営、改装費・家賃等の補助金支援）に関する意見交換を行った。

第2回連携協議会

- 日時： 2019年7月16日（火）10:00～11:25
- 内容： 中心市街地活性化支援事業（県内外のクラフト作家が主体となって企画・運営している催し、「やって三日市」と共催）について報告と意見交換が行われた。

第3回連携協議会

- 日時： 2019年8月26日（月）10:36～11:45
- 内容： 国際化推進事業（インターンシップの次年度に向けて検討、外国人留学生から意見聴取）、中心市街地活性化支援事業（企画・運営ボランティアの学生の協力）について報告と意見交換が行われた。

第4回連携協議会

- 日時： 2019年10月9日（水）9:58～11:35
- 内容： 中心市街地活性化支援事業（「クロベストリートマーケット2109」、RESASデータを用いた黒部市と三日市・生地・石田・宇奈月の4地域の統計分析）、国際化推進事業（宇奈月温泉におけるアジア観光客拡大の可能性に関する探索的調査）について報告と意見交換が行われた。

第5回連携協議会

- 日時： 2019年10月28日（月）9:58～11:10
- 内容： 中心市街地活性化支援事業（「クロベストリートマーケット2109」台風接近のため中止、日本商工会議所地域振興部が分析・提供の「ビックデータを活用した黒部市の地域経済分析」）、国際化推進事業（留学生による宇奈月温泉現地調査の内容）について報告と意見交換が行われた。

第6回連携協議会

- 日時： 2019年11月11日（月）13:10～15:43
- 内容： 中心市街地活性化支援事業（「ビックデータを活用した黒部市の地域経済分析の説明」、国際化推進事業（留学生による宇奈月温泉現地調査について）について報告と意見交換が行われた。

（3）黒部市・黒部商工会議所と包括連携協定締結記念講演会

2019年5月11日（土）、本学と黒部市・黒部商工会議所との包括連携記念講演会が黒部市役所で行われ、大野久芳市長ら約100人が、産官学の連携体制を活かした魅力的な地域づくりに理解を深めた。フリーキャスターの堀尾正明氏の講演の後、大野市長、川端康夫会議所会頭、中島学長とともにパネル検討を繰り広げた。

【基調講演】

- 演題： 「地域の底力がつながって支え合うまちづくり」
- 講師： フリーキャスター 堀尾正明氏

【パネルディスカッション】

- 題目： 「皆でつくろう魅力的なまちづくり」
- パネラー： キャスター 堀尾正明氏 大野久芳黒部市長、川端康夫会議所会頭、中島恭一富山国際大学長

（4）本学留学生による宇奈月温泉現地調査

2019年11月21日、22日の2日間、黒部市及び黒部商工会議所と連携し、黒部市の観光分野における国際化推進事業の一環として、「学生による調査・研究の実

施」を目的とする黒部市宇奈月温泉の現地調査を実施した。本学の中国・韓国・ベトナムからの12人の留学生が1泊2日で、温泉街を散策し、黒部峡谷鉄道の樺平駅や鐘釣駅の周辺を視察した。視察後の報告会においては、留学生から活発な提案があった。旅館や黒部峡谷鉄道、地元商工会などの関係者15人が提案に聞き入った。

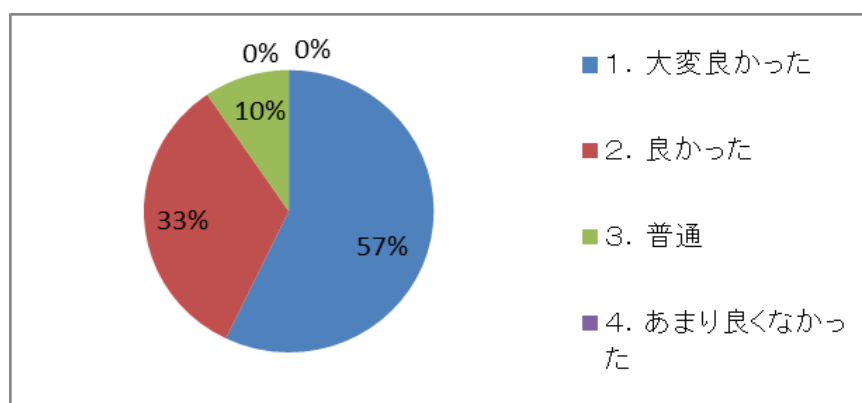
（５）富山国際大学エクステンション・カレッジ特別講演を開催

2019年11月2日（土）、富山駅前CiCビル3階の富山国際学園サテライト・オフィスにて、富山国際大学エクステンション・カレッジ特別講演を開催した。講師による今回の講演内容は、これまでのアナウンサーの経験を踏まえた日本語に関する分析と見解を講義するもので、アンケート結果が示すように参加者にとって意義深いものであった。

演題： 「伝わる日本語とコミュニケーション」

講師： 佐藤 栄治氏（北日本放送 報道制作部 アナウンサー）

参加者： 68名（一般市民、学生など）



参加者へのアンケート結果

2. 課題

- (1) 「エクステンションカレッジ」は参加人数が低迷している。また、参加者は高齢者が中心である。2020年度においては、講座の抱き合わせなどの工夫によって、効率よい運営が期待される。
- (2) 「エクステンション・カレッジ特別講演会」については、近年確実に定着しつつあり、概ね好評であった。今後とも地元にはゆかりのある現在活躍中の講演者を招へいすることでより一層の発展が求められる。
- (3) 昨年度南砺市地域包括ケアセンターにおけるリレー講座の受講者数を拡大することは喫緊の課題であったが、改善は見られなかった。「エクステンションカレッジ」と同様に、講座の抱き合わせの開催など、運営上の工夫が必要である。

《エビデンス 1》

CiC サテライトオフィスの利用状況

令和元年度CiCサテライト利用状況(4/10現在)										
	高校生	一般	小計		30年度	29年度	28年度	27年度	26年度	25年度
4	167	128	295		240	122	59	48	69	134
5	279	118	397		232	217	219	255	364	168
6	266	168	434		446	170	200	221	234	484
7	297	246	543		497	311	388	295	253	375
8	379	109	488		574	359	208	193	183	350
9	247	216	463		500	426	67	102	213	229
10	467	118	585		400	464	247	348	303	359
11	408	192	600		523	437	219	209	388	305
12	433	101	534		514	432	153	277	347	292
1	329	82	411		331	333	137	111	165	275
2	431	60	491		458	614	255	229	230	201
3	72	33	105		305	283	183	103	98	189
計	3775	1571	5346		5020	4168	2335	2391	2847	3361
平成30年度										
	3508	1512	5020							
平成29年度										
	2706	1462	4168							
平成28年度										
	803	1532	2335							
平成27年度										
	978	1413	2391							

サテライト市民講座Ⅰ・Ⅱ

黒部市・黒部商工顕若所・富山国際大学 包括連携協定締結 記念講演会 来場者数				
講座番号	開講日時	講座名	講師	人数
記念講演	5月11日(土)	「地域の底力がつなげて支え合うまちづくり」	堀尾 正明	100
合 計				100
			総計	326

12. 入試対策

1. 実績・現状

(1) 令和元年度学生募集活動の基本方針

- 1) 入学定員の安定確保…平成31年度入学者は前年度比19名増の146名(定員充足率121.7%)となり、2年連続で入学定員を確保した。令和元年度入試においても、引き続き定員確保に全力をあげる。
- 2) 歩留率の安定化…平成31年度の歩留率は60.3%(前年度比+4.4%)で、6年ぶりに60%台に達した。令和元年度においても、受験生・保護者・高校に対し、学部での学習内容などの周知を努める。
- 3) 入学生の質向上…平成31年度は、一般入試やセンター利用型入試では合格水準が上昇したことで、学力の高い受験生が多数入学した。一方、推薦入試による合格者も多いことから、学力の二分化が懸念される。令和元年度入試においても、大学入学共通テストへの移行前による志願者増が見込まれることから、可能な限り合格ラインを上げ、入学生の質向上を目指す。

(2) 令和元年度入試結果全般(表1)

- 1) 基本方針に示した取り組みを継続的に実施したが、入学者は114名(定員充足率95.0%)で、入学定員に到達しなかった。志願者は前年度の329名に次ぐ310名、合格者数は過去最多の247名であり、受験生に対する学部の認知度は高まっている。しかし、これらの志願者・合格者が入学に繋がらなかったことが定員割れの要因といえる。
- 2) 歩留率は46.2%(前年度比-14.1%)で過去最低値であった。歩留率の低下は、富山大学及び大都市圏大学の定員状況、近県私立大学の入試日程変更及び奨学金制度などの他大学の動向や、大学入学共通テストの記述問題の導入見送りなどの外部要因による影響が大きい。
- 3) 不合格者及び合格率は昨年に次ぐ60名、80.5%となり、同様に入学生の質向上が期待できる。令和元年度入試においては、推薦入試での受験者の学力レベルの上昇、一般入試やセンター利用型入試の合格順位上位層及び下位層の未手続により、前年度に比べ学力の差が緩和されている。

表1 入試状況の推移(平成20～令和2年度入試)

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2
入学定員(人)	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120
志願者数(人)	215	187	207	169	172	156	196	215	201	198	237	329	310
受験者数(人)	214	186	204	165	171	156	195	215	198	198	237	326	307
合格者数(人)	187	158	181	153	162	149	193	209	189	181	227	242	247
不合格者数(人)	27	28	23	12	9	7	2	6	9	17	10	84	60
入学者数(人)	132	119	136	104	105	98	110	116	94	108	127	146	114
県内入学者数				78	81	60	83	99	72	85	101	122	99
県内比率	—	—	—	75.0	77.1	61.2	75.5	85.3	76.6	78.7	79.5	83.6	86.8
定員充足率(%)	110.0	99.2	113.3	86.7	87.5	81.7	91.7	96.7	78.3	90.0	105.8	121.7	95.0
歩留率(%)	70.6	75.3	75.1	68.0	64.8	65.8	57.0	55.5	49.7	59.7	55.9	60.3	46.2
合格率(%)	87.4	84.9	88.7	92.7	94.7	95.5	99.0	97.2	95.5	91.4	95.8	74.2	80.5

(3) 入試形態別入試結果

- 1) 令和元年度の推薦入試では、入学者が58名(前年度比-19名)で定員の60名を下回った。推薦入試による志願者が72名(前年度比-18名)と減少したこと、指定校制と公募制一般型専願による受験生が減少したことに加え、他大学を併願する受験生が増加したことが入学者減少に繋がった。
- 2) A0入試は、定員5名に対し入学者は6名(前年度比+1名)、志願者は8名(前年度比+3名)となった。令和元年度は、英語国際キャリア専攻志願者以外に対してもプレゼンテーションを導入したことで、幅広い学生の受け皿となっている。
- 3) 一般入試での入学者は39名(前年度比+4名)、センター入試での入学者は11名(前年度比-11名)となった。志願者は、一般入試では93名(前年度比+14名)、センター入試で

- は 132 名（前年度比－4 名）となった。
- 4) 特別奨学生選抜入試での入学者は 0 名（前年度比－2 名）、志願者は 5 名（前年度比－8 名）と減少した。
- 5) 留学生は海外協定校からの 1 年次入学生及び国内の日本語学校からの 1 年次入学生は 0 名（前年度比－5 名）となった。

2. 課題

（1）歩留率の改善

- 1) 近年、特別奨学生選抜入試で奨学金給付の基準に達しない受験生が多く、奨学金給付の対象となった学生よりも、対象外（一般入試合格扱い）の入学者や一般入試で上位合格した入学者の方が高校時代の成績が良いケースが目立った。高学力層の歩留を高めるためにも、志願者が減少している特別奨学生選抜入試を廃止し、一般入試の上位合格者 10 名程度に「広く薄く」奨学金を給付する、といった方法も検討していく必要がある。
- 2) 近県私立大学の入試日程の変更が、本学の一般・センター試験利用型入試における入学手続きに影響が大きかったため、志願者の少ないセンター中期の廃止や試験日程の変更などについて改正を検討する。また、受験生の他大学・短大・専門学校への流出を防ぐためにも、「補欠合格」などの制度も整える必要がある。
- 3) 令和元年度入試では、付属高校からの入学者が大幅に減少したが、諸活動型入試や一般入試を大都市圏大学との併願で受験する高学力層が増えていることが要因と考えられる。そのため、高校との連携を強化することで、本学への進学を希望する学生を安定的に確保することが課題となろう。

（2）留学生の確保

- 1) 令和元年度は、近年、入学者が続いていた日本語学校協定校からの留学生が 0 名であった。そのため、日本語学校との連携の強化や新規開拓などの対策をしていく必要がある。
- 2) 海外協定校については 2 年連続で 0 名であった。留学生の募集にあたっては、海外協定校＝編入学生主体、国内の日本語学校＝1 年次入学生主体といった棲み分けをすることも検討課題となろう。

（3）広報の質向上

- 1) 高学力層を多く取り込むため、授業改善や教員の研究の活発化を促し、すぐれた授業の内容や教員の研究等についても、わかりやすく伝えていく必要がある。
- 2) 進学説明会の内容がややマンネリ化してきたため、教員と学生が対話形式で学習体験を語るなど、より実践的な企画を考え、高校生・保護者に教育内容等が明確に伝わるような努力していくことが課題となる。
- 3) 大学案内のパンフレットだけではなく、動画なども含めた HP 上での広報も強化する必要がある。そのためにも、学生や教員のインタビューなどコンテンツを充実させることも課題となろう。

13. ホームページ・広報活動

1. 実績・現状

ここでは、入試関連の広報を除き、教員・職員による広報活動について示す。

(1) ホームページ

表 13-1 ホームページへのアクセス件数

年度	年間アクセス件数 (注)	一日平均件数	増減率（前年比）
2013 年度	約 433 万件	約 11,800 件	
2014 年度	約 490 万件	約 13,400 件	約 13%増
2015 年度	約 467 万件	約 12,800 件	約 5%減
2016 年度	約 473 万件	約 13,000 件	微増
2017 年度	約 505 万件	約 13,800 件	約 7%増
2018 年度	約 720 万件	約 19,700 件	約 43%増
2019 年度	約 900 万件	約 28,500 件	約 45%増

(注) 画像、PDF ファイル等を含む

表 13-2 ニュース&イベントへの投稿件数

年度	大学計	現代社会学部	子ども育成学部	各センター等
2013 年度				
2014 年度	285	95	88	102
2015 年度	235	79	75	81
2016 年度	210	75	65	70
2017 年度	190	84	39	67
2018 年度	218	84	76	58
2019 年度	216	106	47	63

表 13-3 ホームページの更新

年度	更新内容
2013 年度	2012 年末に大学ホームページをリニューアル 3 専攻のホームページデザインを統一化 産業界 G P のホームページを作成 各専攻の話題や注目情報・ニュースなどを追加 シラバス、教員紹介、紀要データなどを更新・追加
2014 年度	専攻別のページの更新に取り掛かった。それぞれの専攻のカリキュラム概要、就職先、先輩からのメッセージ等の内容を更新した。
2015 年度	各専攻のページ、シラバス、教員紹介、紀要データなど、経常的な更新のみ。
2016 年度	各専攻・各センターのページ、シラバス、教員紹介、紀要データなど、経常的な更新のみであった。

2017 年度	各専攻・各部署のページ、カリキュラム、教員紹介、紀要データなどの更新。 2018 年度開設の新専攻（英語国際キャリア）のページを追加。 シラバスは別サーバに移転。
2018 年度	経常的な更新に加えて、英語国際キャリア専攻のページの充実、および経営情報専攻の情報系科目を充実させるなど、新カリキュラム関係のページを追加した。
2019 年度	昨年度に引き続き経常的な更新を実施。新カリキュラムの導入に伴い、カリキュラムツリーを充実させた。

・ 東黒牧ニュースの発行件数

2014 年度：19 件

2015 年度：32 件

2016 年度：9 件

2017 年度：4 件

英語でのニュースの発信

2017 年度：7 件

2018 年度：2 件

(2) 新聞

表 13-4 現代社会学部に関する記事掲載件数

年度	大学・学部・OB	学生の活動	教員の活動	計	備考
2013 年度				89	13 年 6 月～14 年 3 月 17 日。すべての新聞が対象。
2014 年度		85	36	121	14 年 3 月 17 日～15 年 3 月 19 日。すべての新聞が対象。
2015 年度	27	35	18	80	15 年 3 月 23 日～16 年 3 月 15 日。北日本新聞が対象。すべての新聞を対象にすると 118 件。
2016 年度					北日本新聞が対象
2017 年度					
2018 年度			5 回	5	北日本新聞世界遺産シリーズ（佐藤悦）
2019 年度			3 回	3	北日本新聞砂防シリーズ（尾畑）

(3) 放送（テレビ、ケーブルテレビ、ラジオ）

表 13-5 放送で取り上げられた件数

年度	テレビ	CATV	ラジオ	備考
2018 年度	4		秦野教授（4/月）	FM 富山
2019 年度			フランク（4/月）	FM 富山

2. 課題

(1) ホームページ

昨年度にセキュリティ向上のためのサーバ電子証明書（仮バージョン）を導入し、通信経路の暗号化を実現したことに伴い、今年度も昨年度に引き続き、アクセス件数は昨年度比 45%増と大幅な伸びとなった。

来年度はホームページデザインの一新を予定しており、大学広報の一環としてサービスの向上、アクセス効率の向上を図る予定である。

(2) 新聞

積極的に、マスコミへの周知を図っていくことが重要である。

(3) 放送（テレビ、ケーブルテレビ、ラジオ）

FMとやまに出演の英語国際キャリア専攻の秦野教授の話聞いたなどが入試のアンケート結果から動機付けになっていることから、今後も積極的にマスコミへの出演依頼など受けていくことが必要である。引き続き2019年度からH英語国際キャリアのマーク・フランク准教授がFM 富山に毎週水曜日出演している。さらに多くの教員の研究成果が発信できるようにしていくことが課題である。

14. 研究活動

1. 学会発表、論文発表および著書

1.1 学会発表

- (1) 守屋勇樹、田畑剛、岩崎未央、河野信、五斗進、石濱泰、瀧川一学、吉沢明康: 深層学習に基づくペプチド由来イオンピークの新規検出手法、第 67 回質量分析総合討論会、つくば国際会議場 (2019 年 5 月 15 日～17 日)【招待講演】
- (2) Eric Deutsch, Juan Antonio Vizcaino, Yasset Perez-Riverol, Jeremy Carver, Benjamin Pullman, Shin Kawano, Zhi Sun, Luis Mendoza, Pierre-Alain Binz, Gerben Menschaert, Nuno Bandeira: Proteomics Standards Initiative (PSI) Universal Spectrum Identifier (USI), 67th American Society for Mass Spectrometry (ASMS) Conference, Atlanta, USA (2019.6.2-6)
- (3) Masanobu Jimbo, Nobutaka Mitsuhashi, Shigeo Mitsunari, Shin Kawano, Toshiaki Katayama, Kiyoshi Asai and Kana Shimizu: Privacy-preserving Search for Sharing Genetic Variants, 27th Conference on Intelligent Systems for Molecular Biology and the 18th European Conference on Computational Biology (ISMB/ECCB) 2019, Basel, Switzerland (2019.7.21-25)
- (4) 吉沢明康、守屋勇樹、河野信、小林大樹、荒木令江、五斗進、石濱泰: SPARQL と配列クラスターを用いたアノテーション支援ツールの開発、第 8 回生命医薬情報学連合大会 (IIBMP2019)、東京工業大学大岡山キャンパス (2019 年 9 月 9 日～11 日)
- (5) Shin Kawano, Shujiro Okuda, Masaki Matsumoto, Yasushi Ishihama: Promotion of proteomic data sharing through a specialized data journal, 18th Human Proteome Organization World Congress, Adelaide, Australia (2019.9.15-19)
- (6) Satoshi Tanaka, Masaki Murase, Masaki Kato, Tsuyoshi Tabata, Maiko Kusano, Shin Kawano, Susumu Goto, Yasushi Ishihama, Akiyasu C Yoshizawa: Mass++ ver.4: an open-source, simple and extensible MS data viewer, 18th Human Proteome Organization World Congress, Adelaide, Australia (2019.9.15-19)
- (7) 守屋勇樹、河野信、奥田修二郎、渡辺由、松本雅記、高見知代、小林大樹、山ノ内祥訓、荒木令江、吉沢明康、田畑剛、岩崎未央、杉山直幸、田中聡、五斗進、石濱泰: jPOST 統合環境の機能深化と連携基盤強化、トーゴの日シンポジウム 2019、日本科学未来館 (2019 年 10 月 5 日)
- (8) Susumu Goto, Yuki Moriya, Shin Kawano, Shujiro Okuda, Yu Watanabe, Masaki Matsumoto, Tomoyo Takami, Daiki Kobayashi, Yoshinori Yamanouchi, Norie Araki, Akiyasu C. Yoshizawa, Tsuyoshi Tabata, Mio Iwasaki, Naoyuki Sugiyama, Satoshi Tanaka, Yasushi Ishihama: jPOST プロテオームデータベースとオミクス連携、第 42 回日本分子生物学会年会、福岡国際会議場 (2019 年 12 月 3 日～6 日)【招待講演】
- (9) 守屋勇樹、田畑剛、岩崎未央、河野信、五斗進、石濱泰、瀧川一学、吉沢明康: 深層学習を用いたペプチド由来質量分析イオンピークの検出法の開発、第 42 回日本分子生物学会年会、福岡国際会議場 (2019 年 12 月 3 日～6 日)

- (10) Ralf Gabriels, Nuno Bandeira, Wout Bittremieux, Jeremy Carver, Matthew Chambers, Shin Kawano, Henry Lam, Tytus Mak, Yasset Perez-Riverol, Benjamin J. Pullman, Vagisha Sharma, Jim Shofstahl, Tim Van Den Bossche, Juan Antonio Vizcaino, Yunping Zhu, Eric W. Deutsch: Spectral Library Format: A standard format to exchange/distribute spectral libraries/archives, EuBIC 2020 Developers' Meeting, Nyborg, Denmark (2020.1.13-17)
- (11) 一井崇「観光と福祉の連携による持続可能な地域形成—京都府与謝野町「与謝野ブランド戦略」に着目して—」, 日本観光研究学会・第34回全国大会, (2019年12月15日)
- (12) 佐藤悦夫 「メキシコ、テオティワカン遺跡“月のピラミッド”出土のパトラチケ期の土器」(ポスター発表) (2020年1月11日。南山大学)『出ユーラシアの統合的人類史学～第2回全体会議予稿集』p.24
- (13) Noriko Obata : "Study on the improvement of the washing condition at the time of disaster "Comfort and Smart Textile International Symposium 2019, Nara (2019.9.6-8)
- (14) 川本聖一, 高村秀紀, 中島古史郎, 他: 高齢者・生活弱者に優しい住宅設備に関する研究、2019年度空気調和衛生工学会研究報告、2019年1月、
- (15) 佐藤綾子: 富山県の観光戦略～総合計画と予算・決算のリンクageから見る課題～、政府会計学会第3回年次大会、早稲田大学(2019年6月15日)
- (16) Bogdan PAVLIY : Bilinguals and multilinguals in a foreign linguistic environment: A case study on language use of Ukrainians in Japan, International Conference "Culture and Cognition in Language 2"; University of Rzeszów, Poland (2019.4. 25-26)

1.2 その他の発表・報告

- (1) 川本聖一: 地域の人々と進める空家リノベーション、平成30年度とやま呉西圏域調査研究事業研究発表会、射水市役所、2019年5月24日
- (2) 川本聖一: 富山市山田村における空家問題等に関する住民意識調査～「富山市空家等対策計画」と山田村の方向性～、第4回全国地域おこし名人・達人サミット in 山田」研究発表、富山市山田交流促進センター、2019年8月25日
- (3) 川本聖一: 地域の人々と進める空家コンバージョン ～空家の有効利用による地域活性化、第24回北陸地域の活性化に関する研究助成報告会、アートホテル新潟駅前、2019年3月9日
- (4) 河野信 : プロテオーム研究のデータジャーナル Journal of Proteome Data and Methods 創刊に向けて、第24回オープンバイオ研究会、北陸先端科学技術大学院大学 (2020年3月14日)

1.3 著書

- (1) 佐藤綾子 (2019) 「地域経済の活性化と富山県の観光戦略—『新・富山県観光振興戦略プラン』のPDCAから見る課題—」、安田信之助編著『地域発展の観光戦略』、創成社、pp.187-209

1.4 学術論文

- (1) Katayama T, Kawashima S, Micklem G, Kawano S, et al. (2019) BioHackathon series in 2013 and 2014: improvements of semantic interoperability in life science data and services. F1000Res. 8, 1677. doi: 10.12688/f1000research.18238.1
- (2) Deutsch EW, Bandeira N, Sharma V, Perez-Riverol Y, Carver JJ, Kundu DJ, García-Seisdedos D, Jarnuczak AF, Hewapathirana S, Pullman BS, Wertz J, Sun Z, Kawano S, et al. (2020) The ProteomeXchange consortium in 2020: enabling 'big data' approaches in proteomics. Nucleic Acids Res. 48, D1145-D1152. doi: 10.1093/nar/gkz984 【査読あり】
- (3) Vos RA, Katayama T, Mishima H, Kawano S, et al. (2020) BioHackathon 2015: Semantics of data for life sciences and reproducible research. F1000Res. 9, 136. doi: 10.12688/f1000research.18236.1
- (4) 一井崇 (2019) 「ユニバーサルツーリズムの新たな視点と地域形成における障害者雇用の役割ー京都府与謝野町「よさのうみ福祉会」の障害者雇用・就労支援事業を通じてー」,『観光研究』第 31 巻第 1 号, pp.19-32
- (5) 川本聖一, 高村秀紀, 中島古史郎, 他: 高齢者・生活弱者に優しい住宅設備に関する研究、2019 年度空気調和衛生工学会研究報告、2019 年 1 月、【査読あり】

2. 紀要執筆状況

2019 年度 第 12 巻第 1 号 (2019 年 10 月発行)

<論文>

- (1) 川本聖一・武部奈津世・坪田はるか, 富山市山田村における空家問題等に関する住民意識調査ー「富山市空家等対策計画」と山田村の方向性ー, 12(1), pp.1-13
- (2) 谷脇茂樹, フィルムコミッションによる地域活性化に関する考察, 12(1), pp.15-35
- (3) Jared Winans・Bogdan Pavliy, English programs and assessments in Japanese universities, 12(1), pp.37-50
- (4) 顔景義, 前期読本作家都賀庭鐘の中国白話小説への利用法について, 12(1), pp.51-62

<研究ノート>

- (5) 伊藤雄馬, TOEIC の不思議な世界を学ぶーCLIL を用いた TOEIC 教授法の提案ー, 12(1), pp.63-68

<資料>

- (6) 才田春夫・伊藤雄馬, ムラブリの智の伝承ー森林資源活用についてー, 12(1), pp.69-73

2019 年度 第 12 巻第 2 号 (2020 年 3 月発行)

<論文>

- (1) 助重雄久・稲場さくら・川平靖晃・木村昌平・清水光・寺崎航太・中山恵輔・浜坂美紅・松本開成・于馨雨, 愛媛県松山市における観光の現況と課題, 12(2), pp.1-13

- (2) 谷脇茂樹・伊藤雄馬, タイにおける観光小規模住民組織(CBT)についてーナーン県における観光政策の取り組みを踏まえてー, 12(2), pp.15-24
- (3) Mark Frank, Intercultural Rhetoric and Local Research in the EFL Writing Classroom, 12(2), pp.25-53

<研究ノート>

- (4) 大谷孝行, 吉本新喜劇における「型」をめぐる考察, 12(2), pp.55-67
- (5) 川本聖一・浅井莉恵・上絢音・竹林和輝, 地域の人々と進める空家リノベーション その2-地域の人々との協働の記録-, 12(2), pp.69-84
- (6) Mark Frank, A Preliminary Literary and Cultural Investigation of Sake Brewing in Toyama Prefecture, 12(2), pp.85-107

3. 競争的資金等による採択研究の概要

3.1 文部科学省科学研究費補助金採択課題研究による研究プロジェクトの実施

<研究代表者>

- (1) 一井崇:ユニバーサルツーリズムの新たな展開と雇用を通じた地域形成に関する研究 (研究活動スタート支援,令和元年～令和2年度)

<研究分担者>

- (1) 佐藤悦夫:テオティワカン「石柱の広場」複合体の発掘調査 (科研 A、研究代表:杉山三郎 愛知県立大学名誉教授、2017 年～2020 年)
- (2) 佐藤悦夫:「出ユーラシアの総合的人類史学:サピエンスの認知的特性と環境構築の解明」(新学術領域、代表:岡山大学 松本直子、2019 年～2023 年)
- (3) 才田春夫・伊藤雄馬:『森のゾミア』論に向けた東南アジア産地狩猟採集民ムラブリに関する学術的研究」(科研、代表:二文字屋脩(早稲田大学講師)2018 年～2020 年)

3.2 富山県ひとづくり財団

- (1) 谷脇茂樹:「北陸新幹線開業後の富山県の観光・魅力創造」富山県ひとづくり財団 高等教育振興事業

3.3 富山第一銀行奨学財団

- (1) 高橋ゆかり:「環境保全意識の醸成のための環境教育プログラム開発のための基礎調査」
- (2) B. Pavily:「ロシア語圏との交流のための社会学的言語研究」

3.4 その他の共同研究・研究事業

- (1) 川本聖一:「地域の人々と共に進める空家コンバージョン」,第 24 回北陸地域の活性化に関する研究助成事業(一般社団法人北陸地域づくり協会)
- (2) 上坂博亨:「地域のバイオマス資源を活用したハウス栽培育成促進に関する研究」,令和元年度富山市梨剪定枝等のバイオマス利用実証業務(富山市・北酸株式会社)

4. 評価と課題

学会発表の件数は15件であり、2018年度の14件とほぼ同程度に推移した。しかしそのうちの10件は新着任の教員によるものであり、既在籍教員からの発表が少ない。この点は、2018年の課題としても指摘したことであり、在籍教員の研究アクティビティーが低下している可能性がある。一方、科研費採択件数については、2017年、2018年においては本学部の新規採択はゼロ件であったが、2019年度には1件の採択があった。研究分担者としての研究は常勤教員において3件、客員教員が2件であった。20余名の教員を擁する学部としては科研費採択件数は十分とは言えない状況と言える。

以上のように、対外的な学術雑誌への投稿や外部資金獲得の状況が低調になっている要因の一つに、本学の学内業務量の多さが挙げられ、このことは昨年度も指摘している。教員個人の努力や工夫では研究時間の確保が非常に難しいことから、学内業務のIT化等による作業効率化が重要課題であり、学園情報教育研究センターにおいて仕事改革を強力に推進していく必要がある。

15. 後援会・保護者対応

1. 実績と現状

(1) 後援会理事会・後援会総会

後援会総会への申込者数は2017年度が特に多かったが、2019年度は会場を従来の市内ホテルから東黒牧キャンパスに変更し、多くの参加者があった。大学の取組みに対して保護者が高い関心をもっていることは例年通りである。

表 15-1 理事会・総会の実施内容

年度	理事会	総会
2016 年度	平成 28 年 6 月 25 日（土） ホテルグランテラス富山 出席者数（理事）18 名	平成 28 年 6 月 25 日（土） ホテルグランテラス富山 申込者数 84 名
2017 年度	平成 29 年 6 月 24 日（土） ホテルグランテラス富山 出席者数（理事）15 名	平成 29 年 6 月 24 日（土） ホテルグランテラス富山 申込者数 120 名
2018 年度	平成 30 年 6 月 23 日（土） ホテルグランテラス富山 出席者数（理事）14 名	平成 30 年 6 月 23 日（土） ホテルグランテラス富山 申込者数 83 名
2019 年度	令和元年 6 月 14 日（金） 富山国際大学呉羽キャンパス 出席者数（理事）11 名	令和元年 6 月 22 日（土） 富山国際大学東黒牧キャンパス 申込者数 109 名

(2) 保護者相談会

保護者相談会への申込者数は、2018 年度から後援会総会時の相談者が大幅に増えていることが特徴で、教職員による個々の学生の指導の実態に対する保護者の関心の高さが伺える。

表 15-2 実施内容

年度	前期	後期
2016 年度	後援会総会時（6 月 25 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 36 名	大学祭時（10 月 29 日・30 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 51 名
2017 年度	後援会総会時（6 月 24 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 51 名	大学祭時（10 月 28 日・29 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 50 名
2018 年度	後援会総会時（6 月 23 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 70 名	大学祭時（10 月 27 日・28 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 35 名
2019 年度	後援会総会時（6 月 22 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 71 名	大学祭時（10 月 26 日・27 日）に実施 事前にゼミ担当教員から保護者あてに 学生に関するコメントを送付 相談者数 37 名

(3) 同窓会

ここ数年、卒業生の出席数は 20 名程度であり、卒業生の大幅な出席数増には至っていない。

表 15-3 実施内容

年度	内容
2016 年度	平成 28 年 8 月 27 日（土）、オックス・カナルパーク・ホテル 第 22 回総会および懇親会 出席者数 計 40 名 卒業生 22 名（人文 7、人文社会 3、地域 3、現代社会 5、子ども育成 2、不明 1） 教育職員 11 名（学長、現代社会 5、子ども育成 5）、事務職員 2 名 同窓会役員 5 名
2017 年度	平成 29 年 8 月 26 日（土）、オックス・カナルパーク・ホテル 第 23 回総会および懇親会 出席者数 計 43 名 卒業生 22 名（人文 16、人文社会 1、地域 1、現代社会 4） 教育職員 14 名（大学長、短期大学長、現代社会 6、子ども育成 6） 事務職員 2 名 同窓会役員 5 名
2018 年度	平成 30 年 8 月 25 日（土）、オックス・カナルパーク・ホテル 第 24 回総会および懇親会 出席者数 計 38 名 卒業生 21 名（人文 13、地域 1、国際教養 1、現代社会 5、子ども育成 1） 教育職員 9 名（現代社会 3、子ども育成 6） 事務職員 3 名 同窓会役員 5 名
2019 年度	令和元年 8 月 24 日（土）、オックスカナルパークホテル富山 第 25 回総会および懇親会 出席者数 計 33 名 卒業生 18 名（人文 10、地域 1、国際教養 0、現代社会 6、子ども育成 1） 教育職員 11 名（学長、現代社会 5、子ども育成 5） 事務職員 1 名 同窓会役員 3 名

2. 課題

(1) 参加保護者との連携強化と情報伝達

後援会総会や保護者相談会には毎年多くの参加者があり、当該機会を教職員と保護者との対話・連携強化の場として今後とも活用する。出席された保護者に対して、総会では大学の頑張っている取組みを中心とした活動内容をしっかり伝達し、保護者相談会では、個々の学生に対するきめ細かな指導ぶりを伝えて、本学の面倒見の良さを伝える機会とする。

(2) 同窓会出席者の増加

同窓会への卒業生の出席増加を図るためには、卒業生が大学とのパイプ作りを希望する必要がある、大学に何を望んでいるかを把握し、その要望に少しでも大学が応えてあげることが肝要である。大学が IT 化の更なる推進を掲げている一環として、卒業生の大学に対する要望を、紙媒体でなく通信の方法を使ってアンケート形式で吸い上げるとともに、例えばリカレント教育を通じて大学が、卒業生の職場に必要な知識や情報を提供できれば、卒業生とのパイプ強化につながる。

16. 文部科学省補助事業 令和元年度「地(知)の拠点大学」

平成 27 年度以降 5 年目の取組みになるが、「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の参加校、及び「地(知)の拠点大学(COC)事業」として、最終年度の令和元年度は次のような取組みを行い、結果を残すことができた。

1. COC+参加校としての取組み事業内容

(1) 参加校 7 教育機関における「能力特性評価テスト」の実施と比較分析

2019 年度において初めて、参加大学 7 機関の協力を得て「課題解決能力特性評価テスト」を実施・分析できた。その結果、次のような点が明らかにされた。

- ①課題解決能力の 5 特性（問題分析力、課題設定力、コミュニケーション力、協働力、遂行力）の得点は、本学が全体的に他の教育機関よりも最も高く教育効果が現れている。
- ②課題解決能力 5 特性の中では、いずれの教育機関においても「協働力」は短期間に教育の効果を上げやすいと推察される。
- ③「課題解決能力特性は学年進行に応じて身に付く」という仮説を実証的に検証した結果、2 ヶ年の経年変化からは現代社会学部の 3 年次→4 年次において、仮説を支持する結果が得られた。また、子ども育成学部においても、現代社会学部ほど明確ではないが、3 年次→4 年次において同様の結果が得られた。

3 ヶ年の経年変化からは仮説を明確に支持するような結果は見られなかったが、5 能力特性別にみると、「協働力」は学年進行に応じて能力の上昇がみられ、4 年間で十分な教育効果を上げることができることが明らかにされた。

(2) 「とやま塾 in HIMI」の合宿研修

ALL 富山 COC+の合宿型セミナー「とやま塾 in HIMI 2019」を 9 月 18 日から 20 日まで、2 泊 3 日の日程で開催し、富山大学・富山県立大学の学生とともに、本学から 10 名、全体で 20 名が参加した。氷見市の地域課題に対する認識を深め、その解決策を探った。

1 開催期間 2019 年 9 月 18 日（水）～9 月 20 日（金）

②目的

- 1) 地域の人々や、他の高等教育機関の学生と交流し、コミュニケーション力を伸ばす。
- 2) 氷見市の素晴らしい自然や文化に触れることで、その良さを知り、富山への愛着を深める。
- 3) 氷見市に代表される地域の課題を理解し、その解決策を協働しながら模索し、地域貢献の態度を醸成するとともに協働力、課題解決力を高める。

(3) 令和元年 ALL 富山 COC+シンポジウム

令和 2 年 2 月 21 日（金）、とやま自遊館にて開催され、7 高等教育機関の学生（代表者）が実施した地域活動について 10 分程度発表したのち、発表した学生、森富山市長、高木富山商工会議所会頭を交えてパネルディスカッションを行った。若い世代の学生らと市長らが、ひとつの議題に向かって話し合う貴重な機会となった。

2. 「地(知)の拠点大学(COC)」における本学の取組み事業内容

(1) 参加校 7 教育機関における「能力特性評価テスト」の実施と比較分析（前掲）

(2) 副専攻プログラムの認知率の向上と修了生の増加

昨年度の副専攻プログラムの修了生は2名と少なかったもので、プログラムの知名度の向上を図り、修了生の増加に繋げた。

(3) 地域志向科目「地域課題探求講座」並びに「キャリアデザイン講座 b」「経営者講座」の講義内容の見直しと充実・強化

- ① 「地域課題探求講座」は時間割編成の問題から必修科目から選択科目に変更され、当初の学習ステップとのギャップが生じたので、授業内容を絞り込み、県内の地域社会の問題を具体的に理解し論理的・体系的に分析・発表できる力を養成するために、最先端の外部講師を招聘して実践的な学習を試みることによって、授業の魅力効果を高めることにした。
- ② 「キャリアデザイン講座 b」（1年次・1単位・必修）は1年次を対象とした必修科目であるが、講義内容は「働く意義、求められる企業人像、必要される社会人マナー」等に重点を置いて講義を行い、社会人・企業人としての基礎を学ぶことにした。
- ③ 「経営者講座」（2年次・2単位・選択）は2年次を対象とした選択科目であるが、就職活動の第一歩として、県内の魅力的な企業の経営者の方を幅広く招聘して、当該企業の経営方針や考え方、人材教育の在り方、今後の事業展開等について講義を行うことにした。

(4) 地元就職率及び定着率の向上を図るための継続的支援事業の実施

① 県内企業等の人材ニーズの把握

県内企業等の人材ニーズを把握するために、「令和元年度採用活動に関するアンケート調査」「アンケートによる就職ニーズ・企業の要望事項の収集と分析」「令和元年度企業・事業所・大学講演会」を実施した。

③ 保護者に対する就職活動の理解促進

特に3年生の保護者を対象に、最近の就職活動の動向や本学の就職活動の実態等を中心に説明することによって、保護者の就職活動に対する理解促進を図った。また、「就職活動に対する保護者の意識調査」を実施したうえで、その分析を踏まえて、「保護者向け一般企業就職希望者対象説明会及び懇話会」を開催した。

(5) 地域連携活動

- ① 包括連携協定を締結している3自治体（富山市、南砺市、黒部市）とは、連絡調整会議において検討・討議すべき事項を議論し、方向性を決めてから具体的な事業として展開した。

富山市⇒富山国際学園地域交流センターサテライトオフィス（CiC 3階）の「（仮称）とやまシティラボ」構想有識者会議（外部有識者含む）

南砺市⇒第1回、第2回「居住意向調査」と福野まちづくり勉強会の実施 福野まちづくり協議会との連携

黒部市⇒黒部市三日市商店街の空き店舗等の実態調査実施、留学生の現地視察による宇奈月温泉界隈のサイン評価調査

②地域連携講座の開催

③庶務担当者連絡会議の定期開催(1回/月)

3. 総括

本事業は、今年度が補助事業の5年目に該当し今年度をもって終了することになるが、最終年度において漸く、学生の社会貢献活動に対する関心度は拡がると共に、理解度も進み参加意欲も増し活動水準も高まってきたと言えよう。今こそ、こうした学生の気運を次年度以降も着実に醸成して、学生の自主的・意欲的な学習欲・行動欲を更に極めていくことが肝心であるとする。現在の学生は地域社会との交わりの中でいろいろなことを学び体験し自己成長を図っていくことが生きた本当の勉強と言えるのではないかと思います。